

高知大学考古学調査研究報告第3冊

南国市における大型後期古墳の調査

2006年3月

高知大学人文学部考古学研究室

南国市における大型後期古墳の調査

2006年3月

高知大学人文学部考古学研究室

例　言

1 本書は高知県南国市明見に所在する明見彦山1号墳の墳丘測量・石室実測調査と南国市岡豊町に所在する小蓮古墳の石室3次元デジタル計測の調査報告である。

2 明見彦山1号墳ならびに小蓮古墳の調査担当等の概要は以下の通りである。

〈明見彦山1号墳〉

(1) 調査は、高知大学人文学部人間文化学科考古学研究室が主体となり、調査を実施した。

本調査は2005年度高知大学学長裁量経費「南国市指定明見彦山古墳の調査研究と普及啓発プログラムの作成」の研究助成を受けて実施した。調査は、清家章（人文学部助教授）が担当した。

(2) 調査期間は2005年12月16日から12月28日である。

(3) 調査には高知大学大学院人文社会研究科大学院生・人文学部考古学ゼミ生・地域変動論コース2年生ならびに大阪大学院生と岡山大学院生が参加した。参加者は以下のとおりである。石坂泰士（岡山大学大学院）・中久保辰夫・横田真吾（以上、大阪大学大学院）・枡家豊（高知大学大学院）・河鰐愛・大森麻衣子・鈴江祐・鈴木誉也・中井紀子・矢部俊一・渡辺可奈子・岡本治代（以上、高知大学学生）。

(4) 調査を実施するにあたり大阪大学考古学研究室・岡山大学考古学研究室・高知県教育委員会文化財課・高知県文化財団埋蔵文化財センター・南国市教育委員会・明見公民館・明見彦山古墳保存会・地元自治会の諸団体・池澤俊幸・高橋照彦・高松雅文・田所千佳・田渕博之・寺前直人・永澤廣三・新納泉・浜田栄一・浜田利祐・浜田佳・福永伸哉・松田直則・森田尚宏・山本哲也の皆様より多大なご協力をいただいた。心よりお礼申し上げます。

〈小蓮古墳〉

(1) 小蓮古墳の調査は独立行政法人情報通信研究機構と本考古学研究室が共同で調査を実施した。調査担当は、門林理恵子（情報通信研究機構）と清家である。

(2) 調査期間は2005年2月10日から2月18日である。

(3) 3次元計測は株式会社キャドセンターが担当した。担当者は高瀬裕・山田修・福島綾子の諸氏である。また、調査には以下の高知大学人文学部学生が参加した（学年は調査当時）。枡家豊・赤畠資佳・河鰐愛・斎賀智子・林君平・中井紀子・佐伯麗。

(4) 調査を遂行するにあたり、株式会社トヨタ部品四国共販・希望ヶ丘学園・高知県教育委員会文化財課・高知県文化財団埋蔵文化財センター・南国市教育委員会・小蓮公民館・地元自治会の諸団体・田所千佳・田渕博之・名本二六雄・廣田佳久・森田尚宏・山本哲也・吉本詔一・地権者の皆様より多大なご協力をいただいた。心よりお礼申し上げます。

(5) 3次元データの処理と整理に関しては古川亮（広島市立大学情報科学部情報メディア工学科）と水口隆介（同）両氏のご協力を得た。心よりお礼申し上げます。

3 写真は主として清家が担当した。図版7と図版8-1は廣田佳久氏より提供を受けた。

4 挿図のうち、図1・2・7・10・18・19の方位は真北を示し、図8・9・15の方位は磁北である。標高は海拔を示す。

5 横穴式石室の左右を示す場合、奥壁から羨道方向を見た場合の左右をいう。

6 本書の執筆は、清家・鈴木・枡家・横田が担当した。分担は文末に示した。

7 本書の編集は清家が担当した。

目 次

第Ⅰ章 調査経過	1
1 周辺の遺跡	1
2 調査の経緯と経過	3
第Ⅱ章 明見彦山1号墳の調査成果	5
1 古墳の立地	5
2 墳丘測量の成果	6
3 石室実測の成果	8
第Ⅲ章 小蓮古墳の調査成果	13
1 古墳の立地	13
2 既往の調査	14
3 石室計測の成果	16
4 3次元計測の活用と有効性	19
第Ⅳ章 まとめと若干の考察	23
1 調査成果のまとめ	23
2 明見彦山1号墳と小蓮古墳の石室比較	23
3 古墳時代後期の土佐における小蓮古墳と明見彦山1号墳の位置	24
4 おわりに	28

図版目次

図版	図版
1 1 明見彦山1号墳の立地	7 1 小蓮古墳墳丘遠景（1972年調査時）
2 明見彦山3号墳	2 小蓮古墳墳丘（1972年調査時）
2 1 明見彦山1号墳西側墳丘	8 1 小蓮古墳石室（1972年調査時）
2 明見彦山1号墳東側墳丘	2 小蓮古墳石室入口
3 1 明見彦山1号墳石室入口1	9 1 小蓮古墳石室玄門（玄室から）
2 明見彦山1号墳石室入口2	2 小蓮古墳石室奥壁
4 1 明見彦山1号墳石室玄門（玄室から）	10 1 小蓮古墳石室側壁の傾斜
2 明見彦山1号墳石室奥壁	2 小蓮古墳石室右袖石
5 1 明見彦山1号墳玄室左側壁	11 小蓮古墳石室3次元計測の点群データ
2 明見彦山1号墳玄室右側壁	
6 1 小蓮古墳の遠景（岡豊城より）	
2 小蓮古墳の立地（南より）	

挿図目次

図1	南国市の位置（矢部製図）	1
図2	周辺の主な古墳（渡辺可製図）	2
図3	小蓮古墳調査風景	3
図4	小蓮古墳石室3次元計測風景	3
図5	明見彦山1号墳調査風景	3
図6	明見彦山1号墳調査中の1コマ	3
図7	明見彦山1号墳の立地（大森製図）	5
図8	明見彦山1号墳墳丘測量図（岡本製図）	7
図9	明見彦山1号墳石室実測図（河鰐製図）	9～10
図10	小蓮古墳の立地（渡辺可製図）	13
図11	周辺の地形	14
図12	小蓮古墳の墳丘（中井製図）	14
図13	1972年当時の石室（枡家製図）	15
図14	1972年調査時の出土須恵器の一部（大森製図）	15
図15	小蓮古墳石室実測図（河鰐製図）	17～18
図16	土佐の横穴式石室玄室の規模（清家製図）	24
図17	土佐の横穴式石室玄室の面積（清家製図）	25
図18	特大型と大型石室の分布（清家製図）	26
図19	特大型と大型石室の分布とティセンポリゴン（清家製図）	27

第Ⅰ章 調査経過

1 周辺の遺跡

小蓮古墳と明見彦山1号墳の両古墳は高知県南国市にある。小蓮古墳は南国市岡豊町小蓮字光り岩に、明見彦山1号墳は、南国市明見字彦山にそれぞれ所在する。高知県南国市は高知県の中部に位置し、県下最大の平野部である高知平野の中心部を占めている（図1）。

南国市は県内で多くの遺跡が所在する地域である。弥生時代には拠点的大規模集落である田村遺跡群などが前期から後期にわたって営まれ、続く古墳時代には、多くの後期古墳が築造される。古代においては土佐国衙跡や土佐国分寺、中世には細川氏の居館である田村城館、長曾我部氏の居城である岡豊城などがあり、南国市は弥生時代から中世に至るまで、土佐地域の中心的位置を占めていた。

高知県には前半期に属する古墳は極めて少ない。古墳時代前期に遡る可能性のある古墳は、土佐地域では南国市長畠2号墳と南国市狭間古墳などがわずかに挙げられるのみであり、明確な前方後円墳も未だ見つかっていない。この他には高知県西部の幡多地域に宿毛市高岡山古墳群や宿毛市曾我山古墳群などが確認されている。

以上のことから高知県の古墳は、そのほとんどが後期に比定されるわけである。後期古墳の多くは高知平野の北に広がる四国山地系の山々の麓に築造され、その主要なものはやはり南国市を中心に分布している。高知平野で最も古い横穴式石室を有する古墳もまた南国市にあり、長畠4号墳と呼ばれている。この古墳からはTK10型式期の須恵器が出土しているが、この後、南国市蒲原山東1号墳にその系譜が続くものと見られ、その後、TK43型式期からTK217型式期にかけて県下最大の古墳群である南国市舟岩古墳群などが造営される。

今回調査した古墳の1つである小蓮古墳は、1972年時の調査においては金銅製の馬具などが発掘され、出土した須恵器はTK209型式期～TK217型式期に比定される。その墳丘と石室は県内最大規模であり、土佐地域において階層的にかなり高い位置にあるものと思われる。その

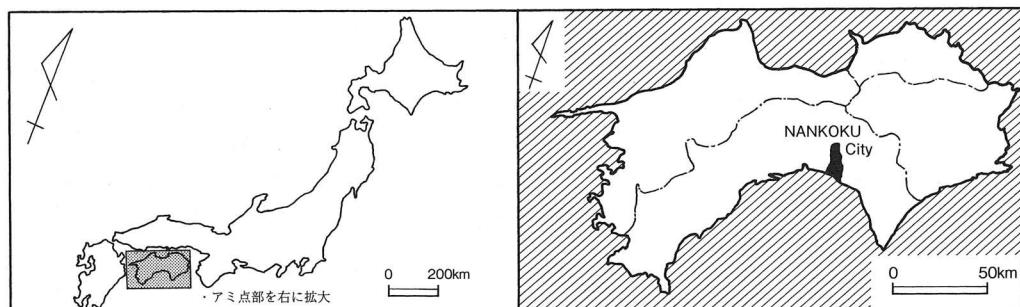


図1 南国市の位置

2 周辺の遺跡

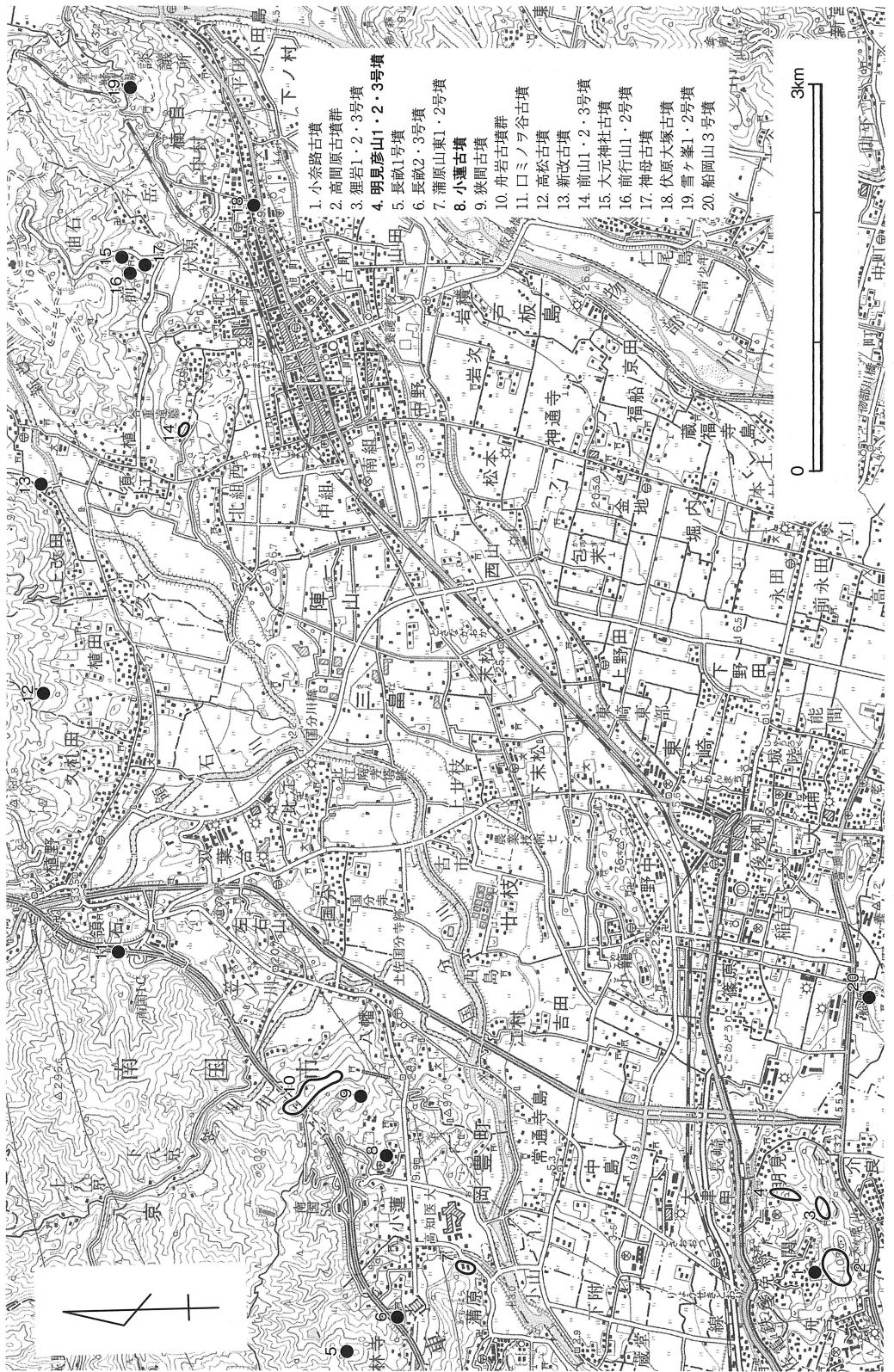


図2 周辺の主な古墳

立地については、上記の長畠古墳群や舟岩古墳群などと位置的に近く、特に時期が重なる舟岩古墳群とは近い関係にあったものと考えることができる。

明見彦山1号墳は、上記の南国市小蓮古墳、高知市に所在する朝倉古墳と共に土佐三大石室の一つに数えられている。その立地は高天ヶ原山と呼ばれる高知平野南部に位置する独立丘陵の北東に伸びる尾根の麓にあり、小蓮古墳や舟岩古墳群など大型古墳が築造された場所からはやや西に離れた位置にある。出土遺物が知られておらず明確な時期などは不明である。(枡家)

2 調査の経緯と経過

小蓮古墳 編者が小蓮古墳を初めて訪れたのは2003年のことであった。石室の大きさに圧倒されるとともに、玄室左側壁の基底石が大きく傾き、袖石も危険な状態であることを認識したのである。小蓮古墳の石室は、県下最大の古墳であり、土佐の古代史を語る上で欠かすことのできない資料である。小蓮古墳は、後述するように1972年に調査が行われているが、石室実測図は左側壁の図面を欠いていた(廣田1972)。古墳が崩壊した場合や、石室を修復する場合には、左側壁のみならず細かな石室の情報が必要である。

しかしながら、通常行う人力による実測作業では長期の日程を必要とする。石室内は倒壊に至らないまでも落石等の危険があり、調査員の安全を考えると長時間の作業は躊躇された。編者は、トルコ共和国ゲミレル島のキリスト教会遺跡や兵庫県勝福寺古墳において、独立行政法人情報通信研究機構の門林理恵子研究員と3次

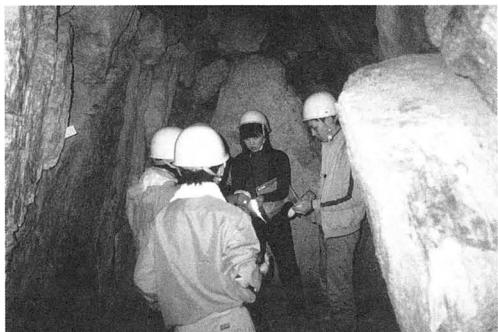


図3 小蓮古墳調査風景

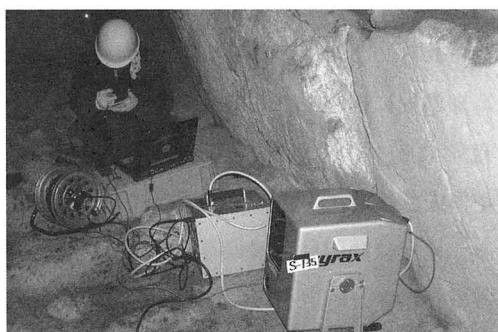


図4 小蓮古墳石室3次元計測風景



図5 明見彦山1号墳調査風景



図6 明見彦山1号墳調査中の1コマ

4 調査の経緯と経過

元デジタル計測を用いた計測調査とその調査成果の活用について共同研究を行ったことがある（福永編2003）。3次元デジタル計測は、作業に携わる人数が少なく作業時間も短い。何よりも石室に関して立体的な情報を得ることができるので、石室の現状や構造を理解するのに役立つ。将来において石室の修復を行う場合や石室に万一の事があれば有効な情報を提供することが可能である。門林研究員に協力を依頼したところ、快諾を得ることができ共同調査を行う運びとなつたのである。

調査は2005年2月10日から18日まで行った。調査には情報通信研究機構の門林研究員と高知大学の清家と学生が参加し、3次元計測の主たる部分は株式会社キャドセンターが担当した。

明見彦山1号墳 明見彦山1号墳は、小蓮古墳・朝倉古墳とならんで土佐三大古墳の一つに数えられる。これまでに調査が行われたことはないので、墳丘測量図は存在せず、石室実測図も高知県史に掲載される略測図があるのみであった（岡本1968）。朝倉古墳（高知大学考古学研究室2005）と小蓮古墳（廣田1972、本書）の基礎資料があるので、明見彦山1号墳の基礎資料が作成されれば、土佐の古墳時代を考える上で重要な土佐三大古墳の基礎資料が揃うことになる。地元には明見古墳保存会があり、本古墳は3号墳とともに地域から大切に扱われている。古墳の保存と活用を行うためにも基礎資料の作成は重要である。以上のようなことから調査が必要であると考え、2005年度学長裁量経費に申請したところ採択され調査に至つたのである。

調査は2005年12月16日から28日までである。調査参加者は例言に記したとおりである。（清家）

参考文献

- 岡本健児 1968『高知県史』考古編 高知県、高知
高知大学考古学研究室編 2005『朝倉古墳測量調査報告書』 高知大学人文学部考古学研究室、高知
廣田典夫 1972「高知県南国市小蓮古墳」『古代学研究』第65号 古代学研究会、大阪：pp.24–28
福永伸哉編 2003『文化財のデジタルコンテンツ化とその応用に関する研究』大阪大学大学院文学研究科考古学
講座、大阪

第Ⅱ章 明見彦山1号墳の調査成果

1 古墳の立地

明見彦山1号墳を含む明見古墳群は、南国市明見字彦山の斜面上に所在する。明見字彦山は南国市西部にある高天ヶ原山の北東部に位置し、現在の高知市と南国市の境界付近にあたる。明見彦山1号墳は、北東にのびる尾根の南斜面上に位置し（図7）、横穴式石室が南東向きに開口している。1号墳から北東へ約200mの所に明見彦山3号墳がある。また、1号墳と3号墳のおよそ中間に位置する場所に明見彦山2号墳があったといわれているが、破壊されており、その規模や形態を把握することは難しい。

明見古墳群が所在する地域は高知県における古墳築造の中心地である高知平野北東部から少し離れた場所にある。高知平野北東部にあって高知最大の規模を誇る舟岩古墳群や、明見古墳群に隣接する高間原古墳群との関係も問われるところである。
(鈴木)

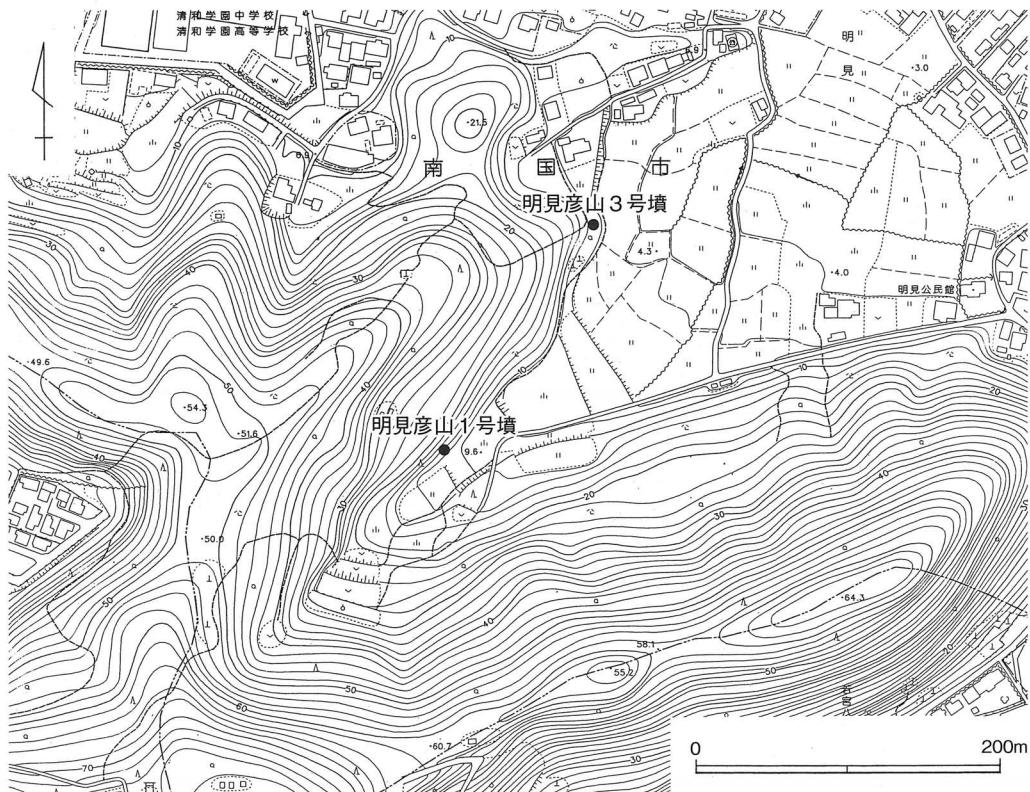


図7 明見彦山1号墳の立地

2 墳丘測量の成果

明見彦山1号墳は、高天ヶ原山から北東にのびる尾根と東へのびるもう一つの尾根によって形成される谷の奥にある（図7）。北東に伸びる尾根の南裾近くに緩斜面があり、ここに墳丘の北側を尾根斜面に寄せて築造が行われている。いわゆる山寄せの古墳である。

墳丘は比較的よく遺存しているようである。段築については、等高線の粗密や現地での目視では確認できなかった。墳丘中央に両袖式の横穴式石室が存在し、南東方向に開口している。以下で墳丘の現状とそこから推測される状況を述べるが、その際には便宜的に図8の上・下・左・右をそれぞれ北・南・西・東として記述する。

墳丘の南側には石室羨道の入口がある。そこから1m南側に標高13.250～13.500mの等高線が走っているが、それ以下では等高線の間隔が広くなるので、標高13.250～13.500m周辺が墳丘南側の裾部の候補となろう。羨道入口の南側、標高13.500mの地点では石室に関わると考えられる石材が一部露出している。羨道側壁の一部あるいは羨道閉塞に関わる石材である可能性を考えられるが、閉塞用の石材だとすれば羨門と墳丘裾が対応することになる。

墳丘南側裾部の候補とした地点は、玄室の中心から約7mのところにある。これを基準にして東西の墳丘を観察すると、墳丘東側でも玄室の中心から約7mのところで等高線の変化が確認される。墳丘西側では玄室の中心から約6mの地点で等高線が変化する。古墳の西側には後世の建物跡と考えられる東西長不明、南北長約9mの平坦面が存在し、その南端には東西に並ぶ石垣が存在する。玄室の中心から墳丘東裾までの長さに比べ、中心から西裾までがやや短くなっている理由は、墳丘西側が建物の築造に際して改変を受けた可能性が考えられよう。よって、墳丘西側の南から北に直線的にのびた溝状の地形と等高線は、墳丘本来の状況を示していない可能性も考えられる。

墳丘北側は、標高16.750mのところに東西長約8mから9m、幅約1mから2mの直線的な平坦面が存在する。この平坦面の北側は尾根の傾斜面であり、南側には墳丘斜面があるので、横からみれば掘り割り状を呈している。しかし、この平坦面は古墳の東側にある緩斜面に連続するので、尾根を掘削して掘り割りを形成したのではないと考えられる。つまり、墳丘の北側を画する目的で、尾根傾斜面との間に距離をおいて墳丘を築造したがゆえに、尾根の傾斜面と墳丘に挟まれた掘り割り状の地形が形成されたと考えられるのである。もちろん、この平坦面や尾根の傾斜面の一部に掘削などの手が加えられた可能性もあり、さらにはもともと古墳の墳丘が尾根と連続するように築造されていたが、後世に手が加えられて現状のような掘り割りが作られた可能性は捨てきれない。しかし、その詳細は今後の発掘調査によって明らかにすべき事項であろう。

このように見えてくると、墳丘の規模は直径あるいは1辺が約14m程度ということになる。問

題は墳形である。墳丘南側と北側の等高線はきわめて直線的であり、南西部の等高線は弧状というよりはコーナーを形成する。しかし、墳丘南側と北側の辺は平行しないので、その点は方墳とするにはやや不自然である。

墳丘東側は、遺存状況が比較的良好であり、南から北へと東側に張り出した弧を描く等高線が、玄室の中心から約7mのところでそれぞれ、東に向かって屈曲していく。しかし、墳丘北側にある標高16.750m付近の平坦面に接するようになると、それより上の等高線は東には曲がらず、そのまま全周し不整円形を成す。この部分を活かすと円墳の可能性が出てこよう。このことから、直径約14mの円墳の可能性が考えられるが、方墳の可能性も捨てきれない。先述の墳丘南側裾部の候補とした地点、標高13.250～13.500mを墳丘南端基底部と考えた場合、標高約18.250mの墳丘最上部までの比高差は4.75m～5.00mとなる。

墳丘より東側の地形をみれば、その傾斜は標高16.750mから13.250mにかけて緩やかである。

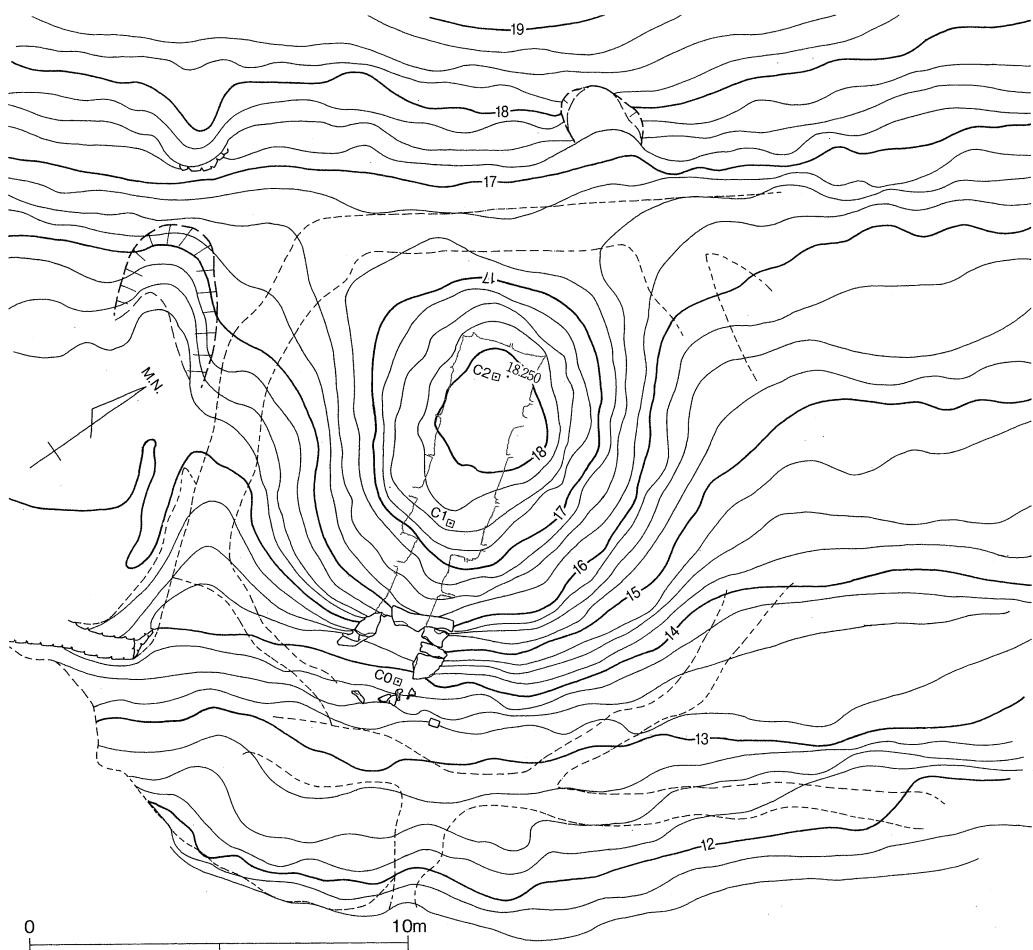


図8 明見彦山1号墳墳丘測量図

8 墳丘測量の成果

13.250mから下は再び傾斜が急になっていることが看取される。おそらく、古墳が存在している場所もかつてはそのような緩やかな斜面地であったと考えられるが、そういった地形への古墳築造は、平坦な場所よりも地理的要因によって少ない労働力で行えたものと考えられる。古墳築造に際しては、まず、緩く傾斜する地山を石室構築場所にあわせて平坦に整形し、そこに石室を構築、さらに盛土を行ったと考えられるが、傾斜地を利用することによって平坦地よりも少ない労力で済んだのであろう。

外護列石や葺石などの外部施設は今回の調査では確認できなかった。

以上、明見彦山1号墳は山寄せの古墳で、地理的な要因によって墳丘南側裾より北側裾が高くなっている。墳丘東側の南から北へと弧を描く等高線が変化する箇所を重視すると、直径約14mの円墳の可能性が高い。ただ、方墳の可能性も視野に入れておくべきである。詳細は発掘調査を行う必要があろう。

(横田)

3 石室実測の成果

石室の規模は現状で、全長8.96m・玄室長5.64m・玄室幅2.16m（奥壁付近）・2.14m（玄門付近）・玄室高2.26m（奥壁付近）を測る。羨道は、長さ3.32m・幅1.20m・高さは現状で1.0mであるが、羨道部は床面が露出せず土壌が堆積しているので、本来はもう少し高くなる（図9）。平面的には長方形の玄室に羨道がつく両袖式であるが、玄室の主軸に対して羨道部の主軸は西に振れる。玄室の主軸を基準とすれば、S-35° 29' 00" - E方向（磁北）に開口する。両袖式であり、袖石は羨道部でせり出さない。

玄室床面はその大部分が流入したと思われる土壌で覆われている。土壌は玄室入口付近が最も厚く堆積し、現状の床面のレベルが一定しない。そのため図9の平面図は一定のレベルで図化したものではなく、現状の床面をそのまま図化している。唯一、玄室の北西角の付近は長軸10cm程度の石が露出しており、床面の一部が露出している可能性がある。おそらく玄室の床面にはこのような礫が一面に敷かれていたと思われる。（図版4-2）

玄室奥壁は、基底石としてやや大きめの縦長の石材と正方形に近い石材のあわせて2個の石材を左側壁⁽¹⁾に寄せて設置する。右側壁との間にできる小さな空間に縦長の石を置いている。その上に細長い横長の石材を3～5段積んで奥壁を作っている。奥壁は全体としてやや内側へ傾いている。

玄室左側壁の基底石にはいわゆる腰石と呼ばれるような特に大きな石を使用しない。高さ50cm程度で長さ80～130cmの石材を横長に6個配置する。基底石の上に4～5段石を積み上げて壁体を構成している。玄室右側壁も基本的に左側壁と同じである。基底部には横長の石をおそらく5石配置し、横長の石材を4～5段積む。

側壁が内側にせり出してきており、側壁の本来の傾きはわかりにくい箇所も多い。とくに右

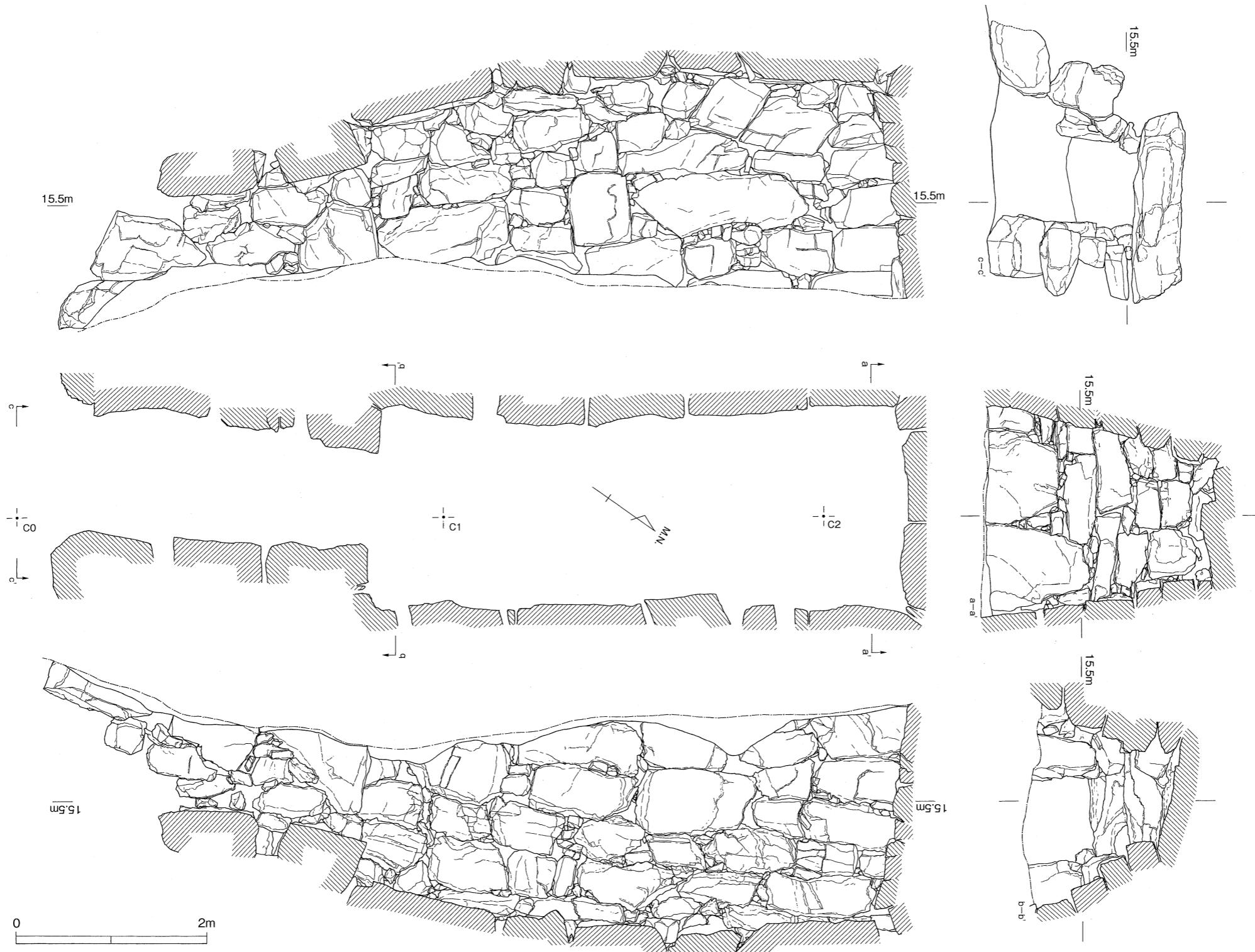


図9 明見彦山1号墳石室実測図

側壁の玄室中央付近のせり出し方が急である。比較的原形をとどめていると思われる奥壁部分を観察すると、基底石から天井石にむかって徐々に持ち送っている状況が観察できよう(図9)。

羨道部は、両袖石とも2段で構成される。縦長に石を置いてその上に横長の石材を置いている。袖石より羨門側は、床面に厚く土壌が堆積しているので不明な点が多いが、左右ともに基底石をおそらく2個配置し、その上に数段石材を積む。ここで気になるのは、玄室の北西隅で認められた床面の礫のレベルは標高14.502前後で、羨道部左側壁の先端にある石材で現在露出している最も低いところは14.002で約50cmの高低差がある。石室床面全体が奥壁から羨道に向かって下っているのか、途中で段が形成されているかは不明である。なお、羨道入口部分の右側壁は羨道内側に大きく傾いていることがわかるが、これは土圧あるいは樹木の作用によるものである(図9のc-c')。

玄室の天井石は5石で構成される。基本的に平天井であるが、奥から3石目までほぼ水平であるが、奥から4石目と5石目は、つまり玄門側の2つの天井石はやや急な角度で傾斜する。そのため、玄門部付近の天井が玄室で最も低くなっている。羨道部の天井は玄室よりも1段低くなっている、玄門部は前壁を構成する。羨道部の天井石は現状で2石存在する。

なお、実測作業中に玄室内から土師器を2片と墳丘南側より須恵器1片を採集している。土師器の器種は不明、須恵器は甕の胴部片と思われる。いずれも小片のため図化はできなかった。

(清家)

注

- (1) 石室の左右は、奥壁から羨道を見た場合の方向を示している。

第Ⅲ章 小蓮古墳の調査成果

1 古墳の立地

小蓮古墳は高知県南国市岡豊町小蓮に所在する。岡豊町は南国市の北部、高知平野全体から見て北端に位置し、小蓮古墳は平野の北に広がる丘陵の一つ、蓮如寺山の南斜面上に立地しており、古墳からは南西方向に平野部を見渡すことができる（図10）。また、南国市の北東、土佐山田町方面へ抜ける際の交通上の要所にある。

小蓮古墳周辺には数多くの後期古墳が存在する。高知県の横穴式石室の初現である長畠4号墳をはじめとして蒲原山東1号墳、高知県最大の古墳群である舟岩古墳群などが6世紀に築造され、南国市北部の丘陵地帯は当地域における古墳築造の中心であったと言うことができる（図2）。そのような中において最大規模の石室と墳丘をもつ小蓮古墳の被葬者は土佐を代表する首長であったと考えることができる。

（枡家）

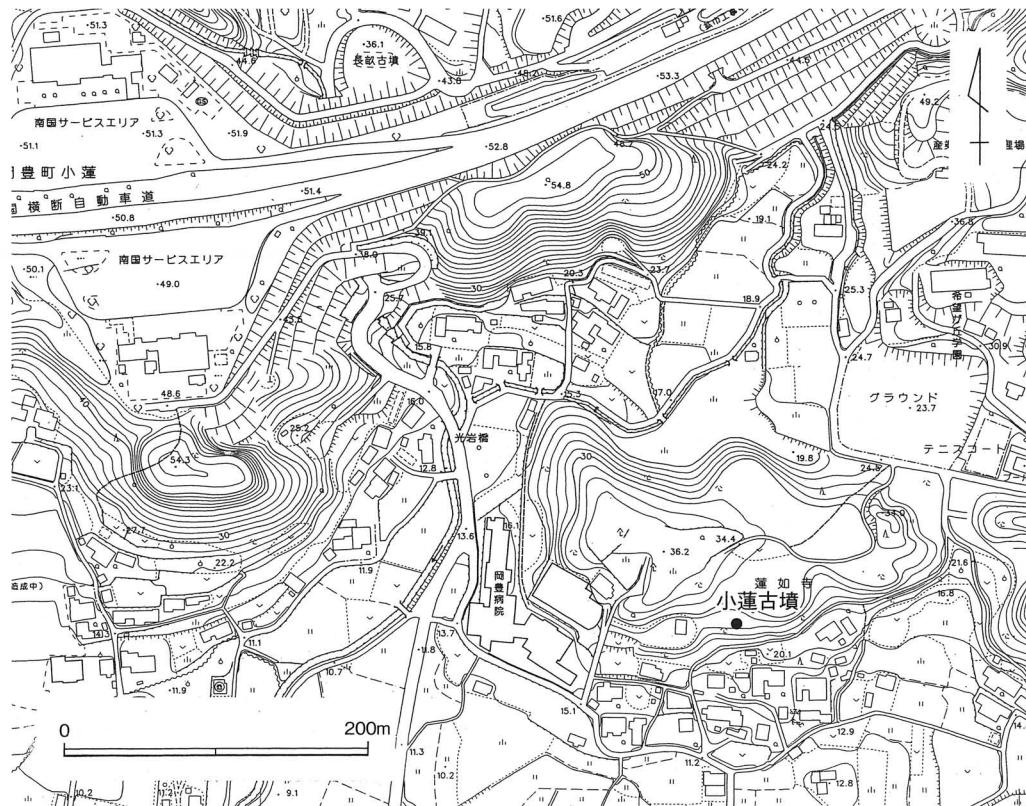


図10 小蓮古墳の立地

2 既往の調査

今回調査した小蓮古墳は、1972年に廣田典夫らによって調査がすでに行われており、石室からは遺物が出土している。なお、本節は主に廣田1972に拠り、その他『南国市史』上巻（廣田1979）なども参考にした。

1972年時の調査では、墳丘の測量調査と石室の実測及び発掘が行われた。1 m間隔の等高線を記録した墳丘測量図が作成され、これによると墳丘全体の形状は橢円形をなしており、石室が南西方向に開口している様子がわかる（図11・図12）。石室内部は奥壁・床面・右側壁の実測が行われている。玄室床面については、隙間なく石が敷かれている状況が描かれていた（図13）。今回の調査時には、床面に人頭大の石が散乱している状態だったので、当時の様相とは大きく変わっている可能性もある。

小蓮古墳は、高知県指定文化財に指定された1928年当時にはすでに石室が開口していたようであるが、1972年の発掘調査時に石室内部から遺物が出土している。その内訳は、須恵器9点・鉄鏃3点・刀子2点・ヤリガンナ1点・金銅製中空玉2点・金環2点、馬具については雲珠1点・飾金具1点、鎧によってよくわからないが轡の一部と思われる部品が2点出土した。なお、雲珠と飾金具は金銅製であった。

小蓮古墳の年代についてであるが、出土した須恵器はおおむねTK209型式からTK217型式に位置付けられる（図14）。TK43型式に遡りうる可能性もあるが、その場合でもTK43型式の

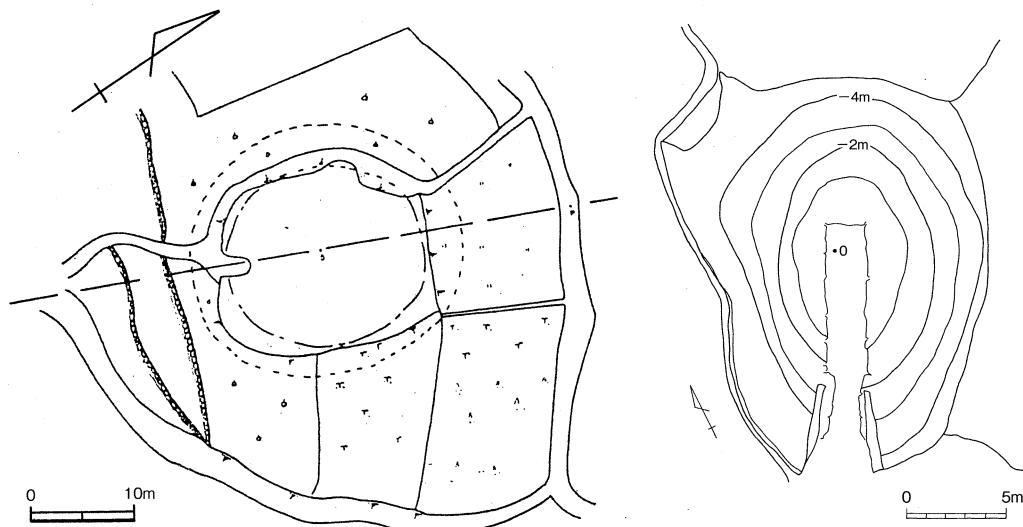


図11 周辺の地形（廣田1972より）

図12 小蓮古墳の墳丘
(廣田1972より再トレース)

中でも最も新しく位置付けられよう。当時の調査において、金環の出土位置などから追葬があつたことが想定されているが、須恵器の型式から見ても追葬があつたと考えてよいものと思われる。以上を総合すると、小蓮古墳はおおよそ TK43型式期新相から TK209型式期に初葬が行われ、その後 TK217型式期まで追葬が行われたと考えられるのである。

墳丘は橢円墳とされているが、墳丘裾部分は大きく削平を受けており、高さ50~80cm程度の崖面が形成されている。墳丘測量図から墳形を確定することは困難である。墳丘の正確な形態

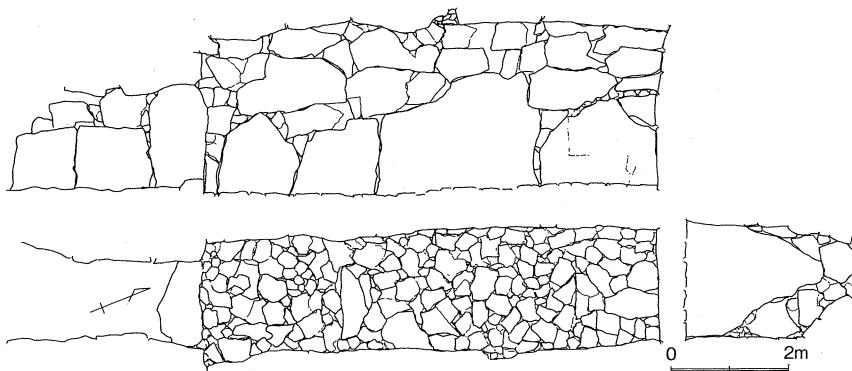


図13 1972年当時の石室（廣田1972より再トレース）

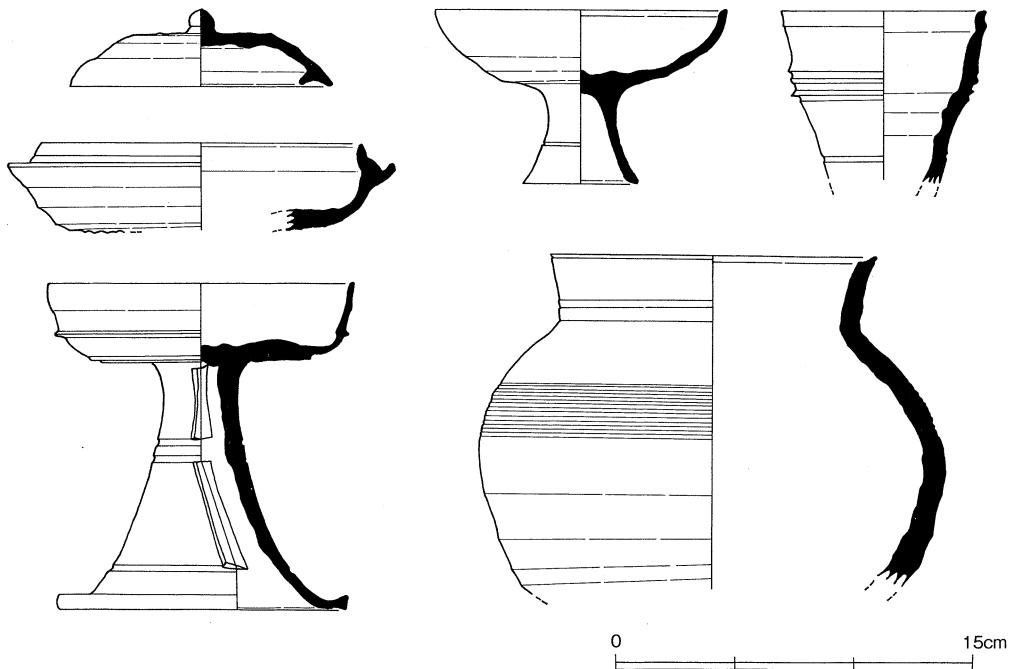


図14 1972年調査時の出土須恵器の一部（廣田1991より再トレース）

を把握することは古墳の性格を探る上においても不可欠である。今後、さらなる調査が必要であろう。

以上のように、小蓮古墳は墳丘及び石室の規模は県下最大級であり、また出土した遺物についても金銅製馬具などがある。これらのことから当古墳の被葬者は古墳時代後期の土佐を代表する首長であったものと考えられ、その歴史的意義は大きい。
(枡家)

3 石室計測の成果

主軸を S -33° 43' 55" -W 方向（磁北）に向けて開口する横穴式石室である（図15）。土佐三大古墳の中でも最大規模を誇り、使用石材もまた巨大である。規模は現状で、全長10.75m、玄室長7.50m、玄室幅1.95m（奥壁付近）・2.18m（玄門付近）、玄室高2.85m（奥壁付近）・2.84m（玄室中央付近）・2.56m（玄門付近）を測る。羨道は、長さ3.25m・幅1.43m・高さ1.85mである。平面的には、細長い長方形を呈していることが大きな特徴である。両袖式であり、袖石は羨道部でせり出さない。

玄室床面は小児頭程度の大きさの石が敷かれている。敷石とするには適切でない角張った石が使用されていた。廣田1972で示されている図面には、敷石が隙間なく描かれているが（廣田1972、本書図13）、現在では石のない空白部分が多い（図版11-3）。床面の石材は原位置から動いている可能性もあるので平面図には図示していない。玄門部には、長さ138cm・幅80cmの敷居石が置かれている。羨道部は流れ込んだとみられる土壤で覆われており、羨道部床面の状況は不明である。廣田は、羨道部には敷石がなかった可能性を示している（廣田1972）。

玄室奥壁は上辺45cm・底辺190cm・高さ235cmの凸形をした巨大な石材を1つまず配置する。その凸形石材と天井石・両側壁の間に隙間ができるが、1辺30~50cmの石材をその隙間に埋めるように積んで奥壁を構成する。奥壁はほぼ直立しているが、わずかに内側へ傾いている。

玄室左側壁⁽¹⁾は3つの基底石を配置する。いずれも長さ1.5mをこえる巨大な石を横長に使用している。基底石の上に1から4石を積み上げて壁体を構成している。玄室右側壁は大きな基底石を4石配置する。左側壁に比べるとやや不整形な石が使用されており、そのため基底石の間に生じた隙間を小さな石材で補充している。基底石の上に2~3石の石材を積み上げて壁体を構成している。

基底石が築造時よりも内側に傾いており、側壁の本来の傾きはわかりにくい箇所も多い。比較的原形をとどめていると思われる奥壁部分を観察すると、基底石は直立あるいはそれに近い傾きで、2石目以上を持ち送っていたものと思われる。左側壁の奥から2番目の基底石は、築造当時より内側に大きく傾いており危険な状態である。同じく奥から3番目の基底石も内側に傾いている。また、左右の側壁上部で脱落して石材を欠く部分もあるので、その点も安全上問題がある。

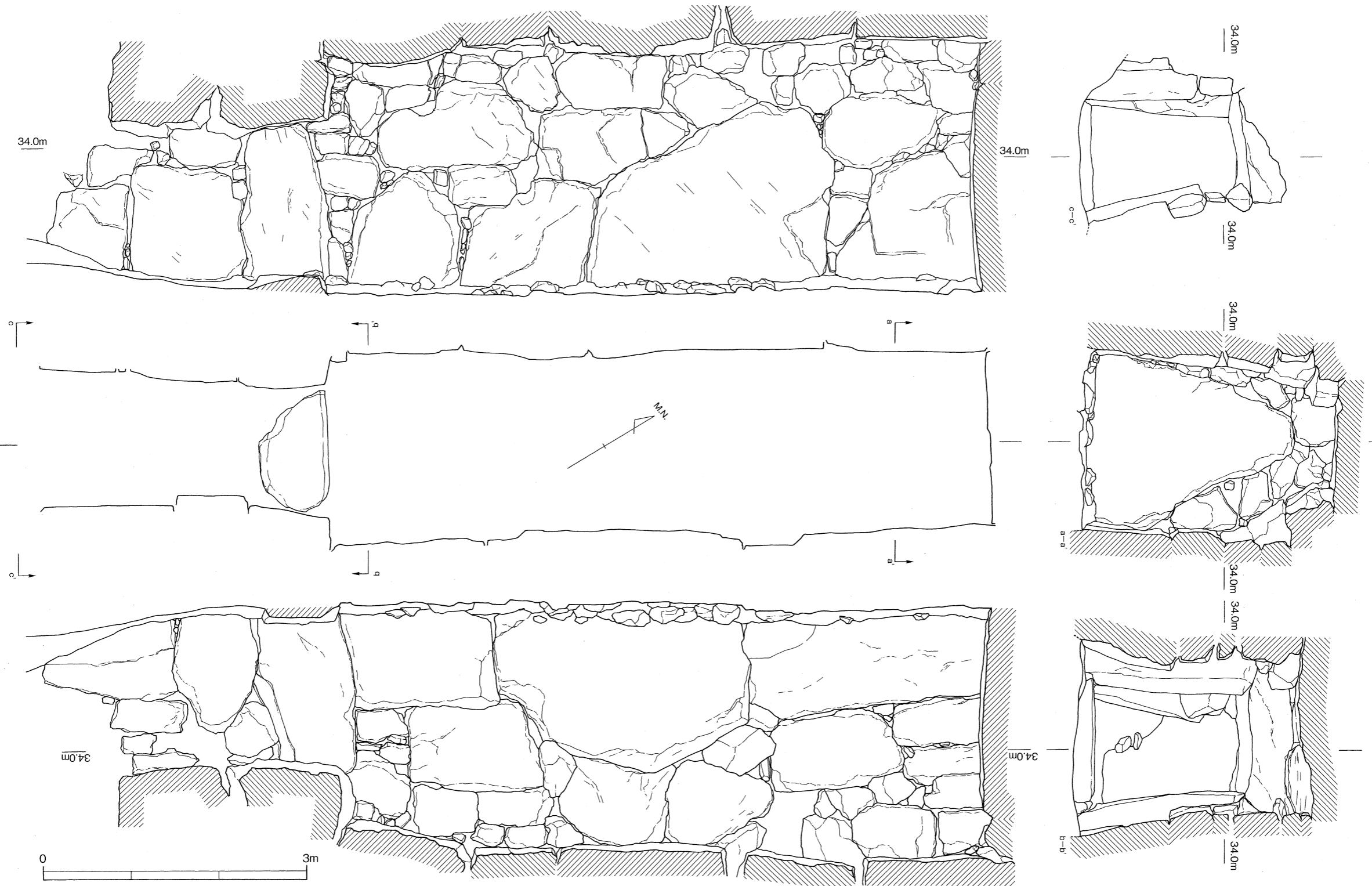


図15 小蓮古墳石室実測図

羨道部は、両袖石とも1石で構成される。両袖石は天井石を支えるには不十分と思えるほどに石材の厚みが薄い。右袖石の上部では厚さが15cm程度しかない。その薄さのためであろうか、とくに右袖石は内側に傾き、裏ごめの盛土が露出している（図版10-2）。

袖石より先は、基底石に大きめの石を置いた上に横長の石材を積む。袖石に隣接する箇所は両側ともに石材が2段に積まれている。最も羨門に近いところは、左側は4段、右側は現状で2段であるがおそらく3段だったと推測される。なお、羨道の外側には人頭大の塊石が積まれているが、閉塞に用いられた石材の可能性と玄室床面の敷石が持ち出されたという可能性が考えられるが、定かでない。

玄室の天井石は5石で構成される。基本的に平天井であるが、奥から4石目までは徐々に天井の高さを低くし、奥から5石目、つまり最も玄門側の天井石はやや急な角度で傾斜する。そのため、玄門部付近の天井が玄室で最も低くなっている。羨道部の天井は玄室よりも1段低くなっている、玄門部は前壁を構成する。羨道部の天井石は現状で2石存在する。

石室側壁を構築する際には、ある段階で積み上げる石材の高さをそろえることが一般的である。そのような場合、石積みに目地が観察されるのであるが、当石室でははっきりとした目地は認められない。ただ強いていえば、袖石の頂部、いいかえれば羨道天井の高さである34.300m付近で石材の高さが揃う部分がとくに左側壁で認められるので、この高さが石材を積み上げる一つの基準になっていた可能性がある⁽²⁾。（清家）

4 3次元計測の活用と有効性

調査の方法 今回の調査では、石室の構造をより詳しく知るため、なおかつ調査の安全を図るために人力による実測作業ではなく3次元計測を行った。3次元計測作業を行う前作業として、まず1等水準点からレベル移動を行って水準の基準を設定した。さらに石室の中軸線を基準とするローカルな座標軸を設定し、その座標軸を基準として3次元計測を行った。3次元計測にはCyra社のCyrax2500が用いられた。3次元計測の作業には3日を要した。その後、反射シートの座標をトータルステーションで計測し、写真撮影などの作業を行い現地での作業を終了した。

後日、3次元のデータの整理・統合がキャドセンターで行われ、その後、整理されたデータを元にした本報告用の2次元の下図作成に移った。下図作成には、広島市立大学情報科学部の古川亮・水口隆介の両氏にご協力いただいた。両氏が研究中の図化ソフトを用いて作成された下図に清家が修正を施し、下図は完成した。

3次元計測の有効性と問題点 3次元計測の特徴の第1は、作業時間の短縮ということが挙げられるであろう。今回的小蓮古墳の3次元計測調査は、レベル移動等の前作業を除くと2.5日で終了している。作業に関わる人間は補助を入れて5名前後であったが、計測が開始されると

オペレーター1名のみが基本的に作業に携わっていた。

本書に掲載した明見彦山1号墳の作業経過と比較してみよう。小蓮古墳と明見彦山1号墳はともに畿内型横穴式石室であるので、比較するのに好都合である。明見彦山1号墳は、実測作業に熟練した大学院生4名と今回実測を初めて経験する学部生1名が割付と実測に携わった。その結果、実測基準線設定作業（割付）に2日、実測作業に8日間を要した。つまり、10日間、延べ人数50名を要したことになる。しかし、小蓮古墳における3次元計測と明見彦山1号墳に要した労働力を単純に比較はできない。小蓮古墳の石室は明見彦山古墳より1回り大きい。今回、報告書に掲載した石室の奥壁・両側壁・床面の総面積は、おおざっぱに見積もって、小蓮古墳は約79平米、明見彦山1号墳約52平米となり、小蓮古墳は1.5倍もの面積がある。明見彦山1号墳の作業量を1.5倍すると、人力による小蓮古墳の石室実測には、15日間・延べ75人は必要となる。石室の表面積が作業労力に比例するわけではない。3次元計測では人による作業では計測が不可能な部分や省略する箇所も計測できてしまう。さらに、小蓮古墳の玄室高は約2.9mもあるので、天井部や側壁上部の割付には困難が伴うことが容易に想像される。よって、先に想定したより多くの日数と人員がほんらい必要とされたはずである。したがって、先に想定した15日間・延べ人数75人という数字は、最低限必要とされる期間と人員なのである。このように低く見積もった数字とくらべても、3次元計測は6分の1以下の人員と期間で作業を終了することができるのだ。現地作業において、3次元計測にかかる労力がいかに少なくてすむかがわかるだろう。

3次元実測の特徴の第2はデータの精密性である。人力による実測作業では、1m間隔の基準線、あるいは50cm間隔の基準線を使用してメジャーで計測を行う。1cm単位の誤差がでることは多々ある。精密性に関わることでは、人力では計測できない部分も、スキャンが可能ならば計測が可能な点も3次元計測の利点である。石材と石材に挟まれた部分や高所でもレーザー光線が届けば計測は可能である。今回は紙幅の都合で図化をしていないが、今回の計測では天井石も計測を行っている（図版11-4）。

3次元計測の第3の特徴は、文字通り立体的な石室の把握が可能な点にある。本報告書は考古学研究に専ら必要な2次元の展開図しか掲載していないが、3次元データは石室の立体的表示が可能である。今回は石室の立体的構造の分析は行っていないが、3次元のデータを用いれば立体的構造を明らかにできる可能性を持つ。そうなれば、石室の修復や万一倒壊に至った場合の復元作業においても貴重なデータを提供できると考えられる。これに関連するが、原則として必要があればどの部分の断面図も作成できるという点も3次元計測の有効な特徴であろう。人力による実測では、あらかじめ断面図を作成する箇所を現地で決定して図化するが、後日それ以外の場所の断面図を作ることは困難である。石室の復元・修復などで断面図が必要とされる場合や、研究の進化に伴って新たな断面図の作成が必要な時には、3次元計測の

データは有効であると言えよう。

第4の特徴としては、立体画像は遺跡の理解をする上できわめて有効な手段であるということであろう。遺跡の活用ならびに普及啓発に有効利用できると考えられる。

ただ、3次元計測を利用する上で問題点もいくつかある。一つは現地での作業はきわめて短い時間でできるが、事後の作業が比較的多いということである。データ採取後、研究所でデータの整理と統合が行われた後に、図化が行われる。考古学における研究は横穴式石室に限らず、2次元の図面を基礎に行われることが多い。よって、本書のような遺跡調査報告書には2次元の展開図が必要とされる。3次元のデータから2次元の展開図を作成することに労力を必要とする。今回の作業では、古川氏らのご協力により、氏が研究中の図化ソフトを用いて展開図の下図を作成していただいた。図化作業にはきわめて有効であった。

のことと大いに関係するのであるが、3次元計測は機械によるデータ採取であるので、図化する際にデータを解釈する作業が必要となる。一例を挙げるならば、ほんらい1個の石材が経年変化などの理由で2個に割れていた場合、機械はそれを認識することなく2個の石として計測する。そのデータを単純に図化すると、2個の石として描かれることになるので、調査者が補正する必要がある。逆に、複数の石材が密に積まれている場合、あるいは何らかの事情でスキャンがうまくいかなかった場合、複数の石材が1個の石として表現されてしまうこともある。石の稜線なのか、亀裂なのかわかりにくい場合も同様である。機械は文字通り機械的なデータ採集を行うのであって、このような解釈は人間の手に委ねられる。今回の作業では、2次元の展開図を作成するにあたり、筆者は写真と古川氏らによって作成された図面を照合し、さらに3度にわたって古墳を訪れて図面を修正した。このような点は3次元計測機器の不備というよりは、もともと機械には無理な作業であって、3次元計測には不可欠な作業なのであろう。破壊を前提とした調査の場合など、再調査が不可能な遺跡では、略測図や記録写真を入念にとることによって、こうした作業に対応できるようにしておく必要がある。ただ、石の輪郭線・稜線・亀裂や石の表面にある汚れなど線の強弱をある程度自動的に機械あるいは図化ソフトが認識できるようになれば、上の労力はある程度削減できるであろう。今後の研究と開発に期待したい。

さらなる要望としては、3次元データ操作を容易にすることが挙げられよう。2次元の図面作成においても、断面図作成においても、その作業は、訓練を受けていない研究者では現在のところできない。誰もが容易に3次元モデルを2次元化できるようになれば、立体的構造物を研究対象とする考古学者にはきわめて便利になることであろう。さらには、博物館や資料館において、3次元モデルを自由に扱うような教育プログラムがあれば、一般市民の文化財への理解は深まるであろう。

以上、3次元計測における有効性と要望について、主に現場作業と今回の報告書作成の過程

から感じたことを述べた。おもに3次元計測データから2次元資料を作成する事について述べたが、もちろん3次元データそのものを扱って研究することも重要である。2次元の資料では盛り込めないデータ量が限りなく含まれているからである。上で少し言及したが、自由な断面図作成も3次元データならではの特性である。福永伸哉も述べるとおり(福永2003)、3次元データを取り扱うことにより、新たな研究視点も生まれてこよう。近年、3次元計測を行う文化財は増えてきているものの、まだまだそのコンテンツは少ない。コンテンツの増加を待ち、3次元データを多く比較した実際の研究を行うことにより、新たな研究視点は生まれてこよう。今後の課題としたい。

(清家)

注

- (1) 石室の左右は、奥壁から羨道を見た場合の方向を示している。
- (2) 左側壁の奥から2番目の基底石は、内側に強く傾いているので高さを減じているが、直立すれば石の頂部は、この高さにはほぼ揃う。このことは偶然ではないと考えられる。

参考文献

- 廣田典夫 1972 「高知県南国市小蓮古墳」『古代学研究』第65号 古代学研究会、大阪 : pp.24-28
廣田典夫 1979 「第1章 古墳時代」『南国市史』上巻 南国市、高知 : pp.182-316
廣田典夫 1991 『土佐の須恵器』四国考古学叢書2、高知
福永伸哉 2003 「研究のねらいと概要」『文化財のデジタルコンテンツ化とその応用に関する研究』2002年度受託研究成果報告書 大阪大学大学院文学研究科考古学講座、大阪 : pp.1-3

第IV章　まとめと若干の考察

1　調査成果のまとめ

本書では、土佐三大古墳のうち南国市に所在する明見彦山1号墳の墳丘測量調査と石室実測調査の成果、ならびに小蓮古墳横穴式石室の3次元計測の成果について報告した。土佐三大古墳のうち、残る高知市朝倉古墳については墳丘測量と石室実測の成果をすでに報告している（高知大学考古学研究室2005）ので、土佐三大古墳の基礎的資料が調ったことになる。

明見彦山1号墳ならびに小蓮古墳の墳丘と石室については、すでに前章までに報告したとおりであるので詳しくは繰り返さないが、明見彦山1号墳は直径約14mの円墳と想定したが、方墳の可能性もある。横穴式石室の規模は現状で、全長8.96m・玄室長5.64m・玄室幅2.16m（奥壁付近）・玄室高2.26m（奥壁付近）を測る。羨道は、長さ3.32m・幅1.20mを測る。

小蓮古墳の石室規模は現状で、全長10.75m・玄室長7.50m・玄室幅1.95m（奥壁付近）・玄室高2.85m（奥壁付近）を測る。羨道は、長さ3.25m・幅1.43m・高さ1.85mである。今回、墳丘調査は行ってはいないが、廣田典夫による墳丘測量調査では、長径28m・短径22mの橢円形であるとの推測が行われている（廣田典1972）。廣田の調査ではTK43型式新相～TK209型式からTK217型式併行の須恵器が出土しており、TK209段階には古墳は築造された可能性が高い。

ただ、墳丘にかんしては、両古墳ともにおおよその規模は測量図から判別できるものの、墳形の確定については発掘調査の必要があろう。

2　明見彦山1号墳と小蓮古墳の石室比較

四国には九州型横穴式石室が多いとされるが、廣田佳久が示すとおり土佐には畿内型が多い（廣田佳1995）。明見彦山1号墳の横穴式石室は山崎信二の分類（山崎2003）でBc型に、小蓮古墳はBb型に近い。

大きな枠組では畿内型という同じ範疇に含まれる2古墳であるが、石室の構造は大きく異なる。石室規模の差異は次節で問うこととして、小蓮古墳が1辺2mを超える巨石を用いるのに対し、明見彦山1号墳では、小形の石を数段にわたって積み上げている。奥壁の違いが顕著で、小蓮古墳は大きな凸形の鏡石を置き、その石と側壁ならびに天井部との空白を埋めるように人頭大の石を置くが、明見彦山1号墳では基底部にやや大きめの縦長の石材と正方形に近い石材を設置し、その上に横長の石を数段積み上げている。小蓮古墳の袖石は左右ともに1石であるが、明見彦山1号墳は左右ともに2段である。細かな共通点もある。両古墳の玄室天井は基本的に水平であるが、玄門部付近の天井石は前壁に向かってやや傾斜する。

小蓮古墳と明見彦山1号墳の石室の差異は、畿内では時期差として理解される（太田1999）。

小形の石材を用いる点、袖石が2段構成である点など明見彦山1号墳の石室は、小蓮古墳の石室に比べ古相を示している。ただ、畿内と同じく時期差となるどうかは、明見彦山1号墳からの出土遺物がない現時点では保留するしかない。次節に述べるように、両古墳には階層差が認められるため、階層差がこうした石室構造に影響を及ぼしたことと考えられよう。また、系統差である可能性も捨てきれない⁽¹⁾。明見彦山1号墳の時期を確定するような調査に今後期待したい。

(清家)

3 古墳時代後期の土佐における小蓮古墳と明見彦山1号墳の位置

規模による分類 次に、小蓮古墳と明見彦山1号墳が古墳時代後期の土佐でどのような階層的位置にあり、被葬者がどのような性格を持つ人物であるのかを考察してみよう。古墳間のランクや被葬者の階層を考える際には、墳丘規模・墳形・副葬品や埋葬施設の規模が取り上げられることが多いが、明見彦山1号墳は未発掘であるので副葬品は明らかでない。比較を行う他の高知の後期古墳についても、調査が行われていないものが多いので、墳丘規模・副葬品などの内容が明らかでないものが多い。よって、比較するべき属性で、ある程度の数が確保される資料は横穴式石室の規模しかない。そこで、横穴式石室、とくに玄室の面積を比較することにしよう。玄室規模は階層差に基づく差異であることが指摘されており（今井・近藤1970、太田1997、尼子1993・2003）、今井堯と近藤義郎は中国地方における横穴式石室玄室の体積から古墳を分類し、その被葬者の性格について言及している（今井・近藤1970）。

図16は土佐にある横穴式石室の玄室長を横軸にして玄室幅を縦軸に示したものである。また、玄室面積を2平米ごとに区切ってヒストグラムを作成した⁽²⁾（図17）。玄室面積が4平米以上10平米未満の石室が多く、これを標準型とすると、標準型より小型の玄室とそれより大型の玄室の3つに分けることが可能であろう。

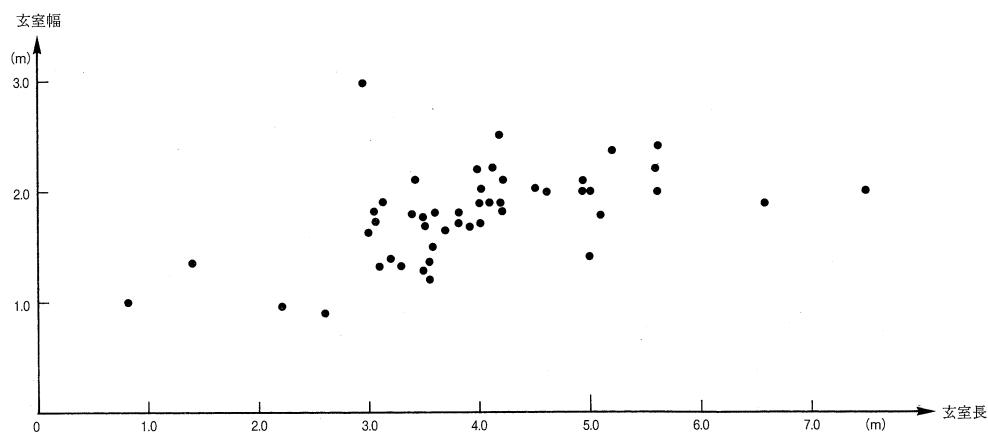


図16 土佐の横穴式石室玄室の規模

標準型と大型を区別する10平米という基準は、副葬品からもその有効性が確認できる。尼子奈美枝によれば、金銅装の馬具が副葬される石室とそうでない石室では玄室規模に差があり、それは階層差に基づくものだと言う（尼子1993・2003）。耕家豊によれば、土佐においても一定レベル以上の規模を持つ石室にしか、金銅装馬具は副葬されないと（耕家2005）。金銅装馬具の副葬は、舟岩古墳群を除くと玄室面積10平米以上の大型石室がほとんどであるので、玄室面積10平米という基準は土佐の後期古墳では大きな意味を持つ。

大型の横穴式石室はさらに2分することが可能である。玄室面積が14平米を超える古墳は小蓮古墳1基しかない。ヒストグラムをみると大きな差を示さないように見えるが、小蓮古墳の玄室面積は15平米であり、第2位の朝倉古墳は12.6平米しかなく、その差は大きい。小蓮古墳の石室玄室高が3m近い点も他の追随を許さない。また、小蓮古墳は長径28mの古墳である可能性が示されている。朝倉古墳が1辺（直径）約20m、明見彦山1号墳が直径14m程度であるから、墳丘規模においても隔絶した規模であるといえよう。そこで小蓮古墳を大きな玄室面積のグループからさらに独立させると、以下の4つの分類が可能となる。

特大型 玄室面積14平米を超える石室。小蓮古墳がこれに属す。

大型 玄室面積10平米以上で14平米未満の古墳。朝倉古墳・明見彦山1号墳・船岡山3号墳・横走古墳・三ツ塚下古墳・舟岩1号墳・舟岩3号墳・舟岩8号墳の諸例。一宮大塚古墳も大型に属する可能性がある⁽³⁾。さらに、伏原大塚古墳の埋葬施設が横穴式石室になる可能性が指摘されている（廣田佳1995）。その石室規模は不明であるが、墳丘規模は小蓮古墳を上回るので、大型あるいは特大型となる可能性は捨てきれない。

標準型 玄室面積4平米以上で10平米未満の古墳。最も類例が多い。

小型 玄室面積4平米未満の古墳。高間原1号墳・高間原3号墳・高間原6号墳・高間原10号墳の諸例。正方形に近い玄室が多く、それらは畿内型の多い土佐の横穴式石室の中では系統が異なるタイプのものである⁽⁴⁾。

今回調査した小蓮古墳は土佐では突出した規模の石室である特大型に属し、明見彦山1号墳はそれに続く大型に属するのである。

特大型石室と大型石室の分布 特大型と大型の横穴式石室を持つ古墳を見てみることに

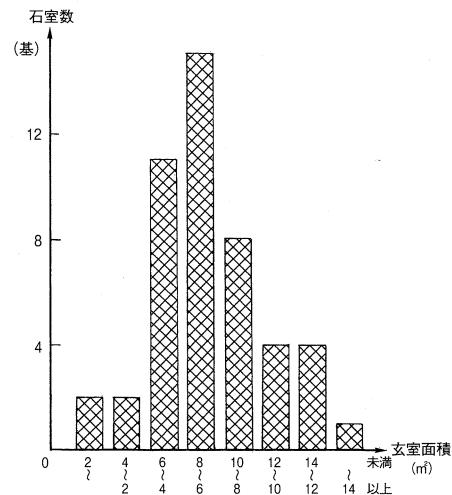


図17 土佐の横穴式石室玄室の面積

26 古墳時代後期の土佐における小蓮古墳と明見彦山1号墳の位置

しよう（図18）。特大型と大型の横穴式石室が、南国市の内陸部のある地点に集中して存在することが理解できよう。その実態は小蓮古墳と舟岩古墳群である。それ以外の大型石室墳は高知平野に散在している様子がうかがえよう。その散在している点にこそ、大型石室墳の性格が表れているといえる。

具体的に大型石室墳の分布を見てみる。西から、鏡川中流域西岸に朝倉古墳、国分川北方の高知市側に一宮大塚古墳、国分川・物部川に囲まれた南国市の平野部西側に明見彦山1号墳と三ツ塚下古墳があり、平野部中央に船岡山3号墳が位置する。国分川上流北岸の台地上に新改横走古墳、国分川上流南岸に伏原大塚古墳がある。そして、国分川中流域北方の岡豊周辺に小蓮古墳と舟岩古墳群が存在するのである。そして、これら大型石室墳の周辺に標準型と小型の石室を持つ古墳あるいは古墳群が存在するという構図がみてとれよう。試みに大型石室墳分布のティセンポリゴンを作成した（図19）。今後の調査によって、大型石室墳が新たに発見される可能性もあるが、大型石室墳が河川や丘陵で区画される領域毎に存在する様子がうかがえよう⁽⁵⁾。大型石室墳はこうした領域を代表するレベルの地域首長墳であるといえる。

もちろん、大型石室には時期差が存在する可能性があり、すべての大型石室墳が同時に併存していたと主張しているわけではない。河川や丘陵で区画されるような領域を代表する首長が存在し、逆にこうした首長を輩出する集団と領域が存在することを主張したいのである。明見彦山1号墳の被葬者は、南国市の南部に広がる平野部の西半を代表する地域首長だったとの評価ができる。

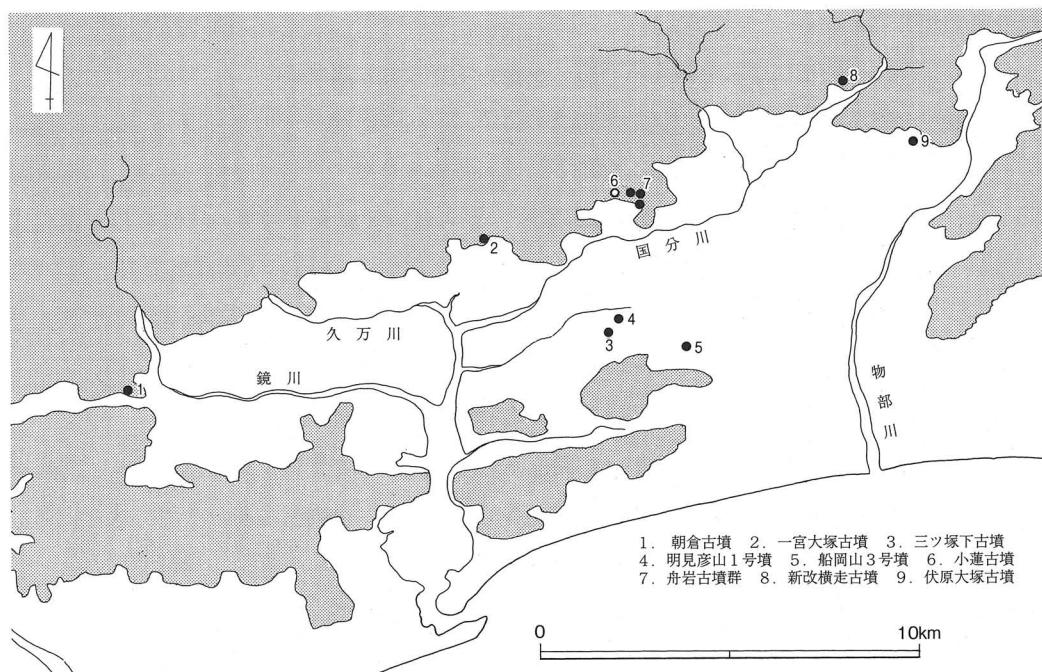


図18 特大型と大型石室の分布

小蓮古墳と舟岩古墳群の関係とその性格 岡豊周辺の古墳分布は他の領域にくらべ特異である。大型石室墳を複数含む舟岩古墳群があり、特大型の小蓮古墳が近接して存在しているのだ。舟岩古墳群から小蓮古墳まで約500mしか離れていない。しかも、小蓮古墳と舟岩古墳群は存続時期が重複する。

小蓮古墳と舟岩古墳群は無関係とは考えられない。舟岩古墳群中にある大型石室と小蓮古墳の石室の構造は類似点が多いからだ。詳細は別稿に譲るが、奥壁・側壁・敷居石などで石材の形状に類似性が認められる。これは石室の設計と構築を担当した集団が小蓮古墳と舟岩古墳群とで共通することを示すが、それは何よりも両者がきわめて緊密な関係の下にあったことを示すものもある。おそらくは小蓮古墳と舟岩古墳群を造営した集団は同一で、その中でも突出した勢力と権限を持つ親族集団が独立して営んだ墳墓が小蓮古墳である可能性があろう。

大型石室墳が河川や丘陵で区画される領域を代表する地域首長の墳墓であるとするならば、その大型石室墳に近接しながら隔絶した規模の石室と墳丘を持つ特大型石室墳、つまり小蓮古墳は、さらに広い領域を代表する首長である可能性が高い。その領域がどの程度であるかは古墳調査が少ないので容易に判断はできないが、現在のところ特大型石室は小蓮古墳1基に限られていることから⁽⁶⁾、少なくとも高知平野レベルの領域を代表し、地域首長を統合する盟主的存在であったと考える⁽⁷⁾。

(清家)

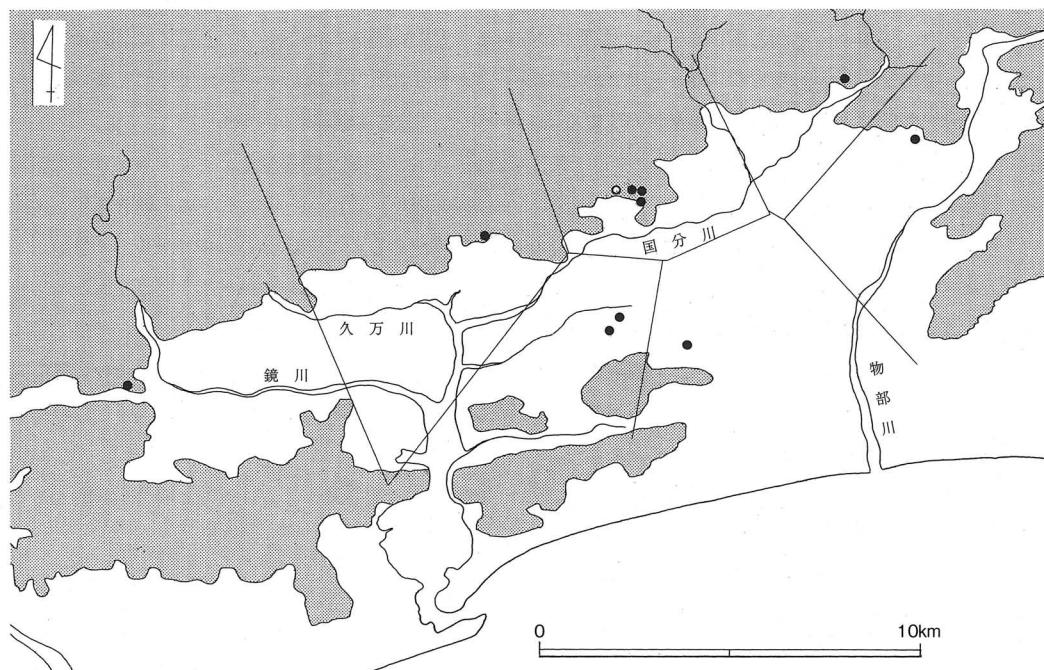


図19 特大型と大型石室の分布とティセンポリゴン

4 おわりに

小蓮古墳と明見彦山1号墳の石室形態についてまとめを行い、石室規模を手がかりに、両古墳の性格について言及した⁽⁸⁾。両古墳は土佐を代表する古墳であるだけに語り残したことは多い。前半期古墳が少ない土佐で、古墳時代後期になって古墳が展開した背景。古墳造営集団とヤマト政権の関係、あるいは中央豪族との関係。横穴式石室の編年と整理、大型石室墳と標準型石室墳・小型石室墳の関係など研究するべき項目は多方面に及ぶ。高知大学考古学研究室では継続的に調査を行い、こうした課題に迫っていきたいと考えている。
(清家)

注

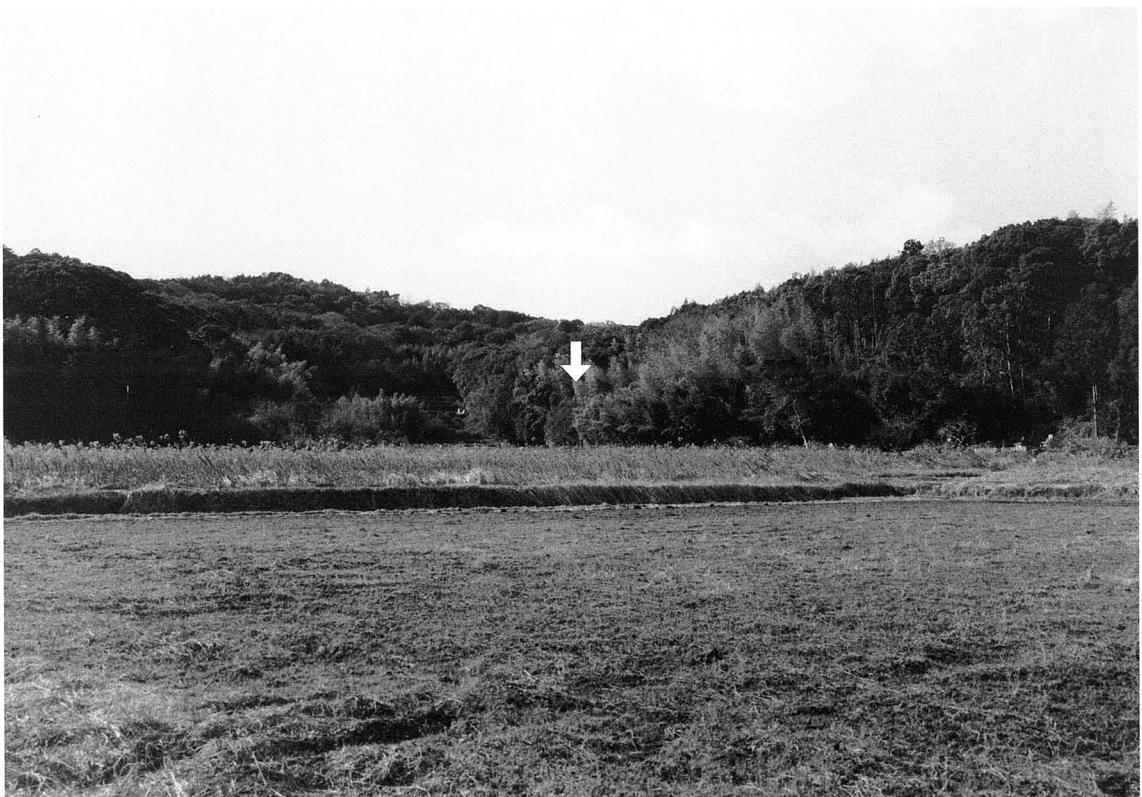
- (1) 階層差のために、より有力な小蓮古墳には最新式の石室が伝えられ、明見彦山1号墳には古相の石室形態が導入されるというようなことも想定できるからである。畿内においても、階層差による規格の違いがあることが指摘されている（太田1997）。
- (2) 土佐の石室については、廣田佳久の集成がある（廣田1995）。本稿の分析は、これを参考に石室図面を新たに集成し、計測値は自らが計測した数字を用いている。
- (3) 明治時代の記録によれば、高知市一宮にあった一宮大塚古墳は、奥行き5間半・高さ7尺・幅7～8尺の規模の石室があったという（岡本編1973：pp.449～452）。長さはおそらく羨道長を含めた全長であろう。これが事実であるとすると、全長は小蓮古墳に次ぐ石室であり特大型に属す可能性もある。しかし、高さは大型石室のそれに相当するので、大型石室に属するものとして本稿では扱う。
- (4) 標準型は4平米から10平米未満という幅広い範囲を含むので、さらなる細分をすべきであるし、可能でもある。だが、小蓮古墳と明見彦山1号墳の位置づけを見ることが本稿の目的なので、本稿ではこのまま論を進める。さらに、小型石室には玄室が正方形に近いタイプが含まれる。これは土佐では決して主流にはならない形態の石室である。この点も興味深い現象ではあるが、この分析は別稿に譲りたい。
- (5) ティセンポリゴンは領域を考える際の目安に過ぎないが、とくに高知平野東半はティセンポリゴンの境界と河川や尾根あるいは峠などの地形の変化が対応する点は興味深い。また、一宮大塚古墳と朝倉古墳が占める領域が広いが、一宮大塚古墳と朝倉古墳の間に別の有力古墳があることを暗示するものかもしれない。一宮大塚古墳と朝倉古墳の間には、白鳳寺院である秦泉寺廃寺があるので有力な集団がここに存在した可能性を示していよう。秦泉寺古墳群が周辺に存在することも見逃せない。
- (6) 先に、伏原大塚古墳が特大型となる可能性を示しているが、その場合でもこの理解は変わらない。伏原大塚古墳はTK43段階であり、小蓮古墳より時期的に確実に先行する。伏原大塚古墳が特大型の場合、小蓮古墳の前時代の盟主的古墳と理解するべきであろう。
- (7) この地は、後に国分寺や国府が営まれる場所に近い。古墳時代後期以降、ここに有力な勢力が存在したことを暗示していよう。
- (8) 本稿考察部分の分析については、川村慎也・高松雅文より助言を得た。

参考文献

- 尼子奈美枝 1993 「後期古墳の階層性－馬具の所有形態と石室規模の相関関係から－」『関西大学考古学研究室

- 開設四十周年記念考古学論叢』関西大学考古学研究室、大阪：pp.439－465
- 尼子奈美枝 2003「古墳時代後期における中央周縁関係に関する予察」『ヒストリア』第183号 大阪歴史学会、大阪：pp.1－39
- 今井堯・近藤義郎 1970「群集墳の盛行」『古代の日本』第4巻中国・四国 角川書店、東京：pp.193－211
- 太田宏明 1997「畿内型石室の属性分析」『千里山文学論集』第58号 関西大学大学院文学研究科、大阪：pp.101－130
- 太田宏明 1999「「畿内型石室」の属性分析による社会組織の検討」『考古学研究』第46巻第1号 考古学研究会、岡山：pp.52－70
- 高知大学考古学研究室編 2005『朝倉古墳測量調査報告書』 高知大学人文学部考古学研究室、高知
- 岡本健児編 1973『高知県史』考古資料編 高知県
- 廣田典夫 1972「高知県南国市小蓮古墳」『古代学研究』第65号 古代学研究会、大阪：pp.24－28
- 廣田佳久 1995「高知の横穴式石室」『四国における横穴式石室の成立と展開』古代学協会四国支部第9回徳島
大会資料 古代学協会四国支部、徳島：pp.80－95
- 舟家 豊 2005「古墳時代後期における土佐の鉄鏃と地域間交流」第2回高知考古学研究会発表資料 高知考古
学研究会、高知
- 山崎信二 2003『古代瓦と横穴式石室の研究』同成社、東京

図 版



(1) 明見彦山 1号墳の立地



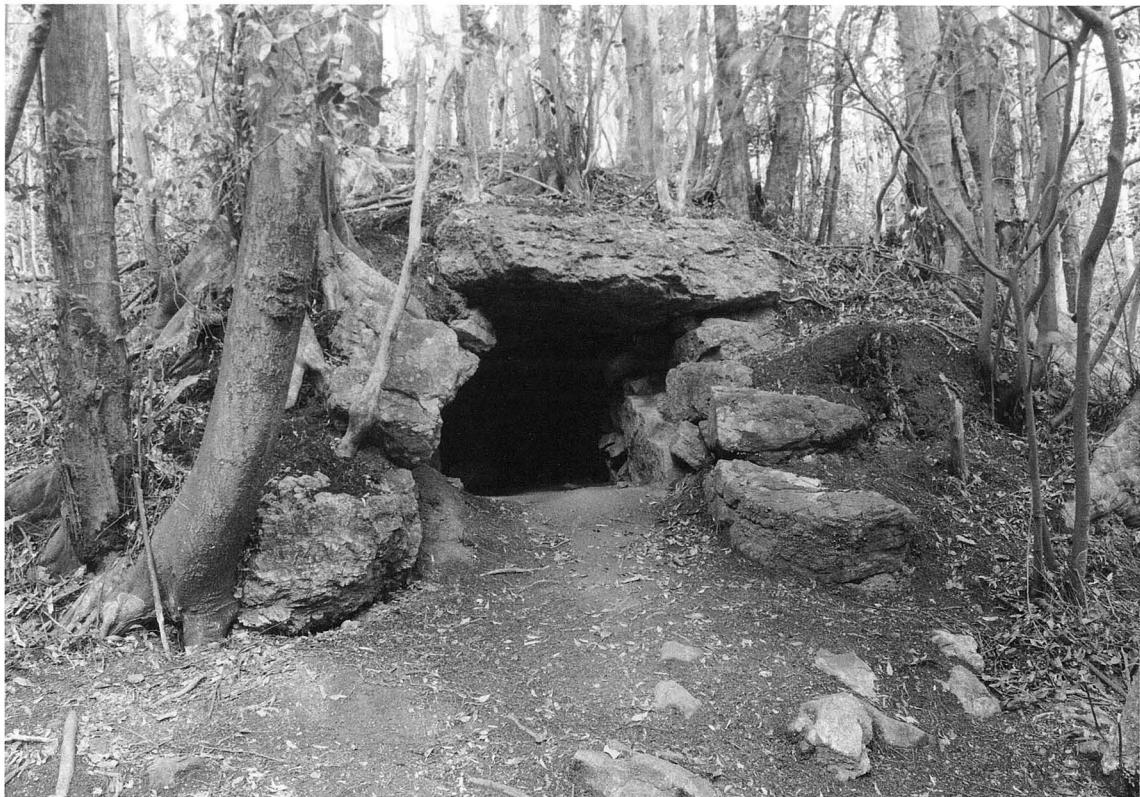
(2) 明見彦山 3号墳



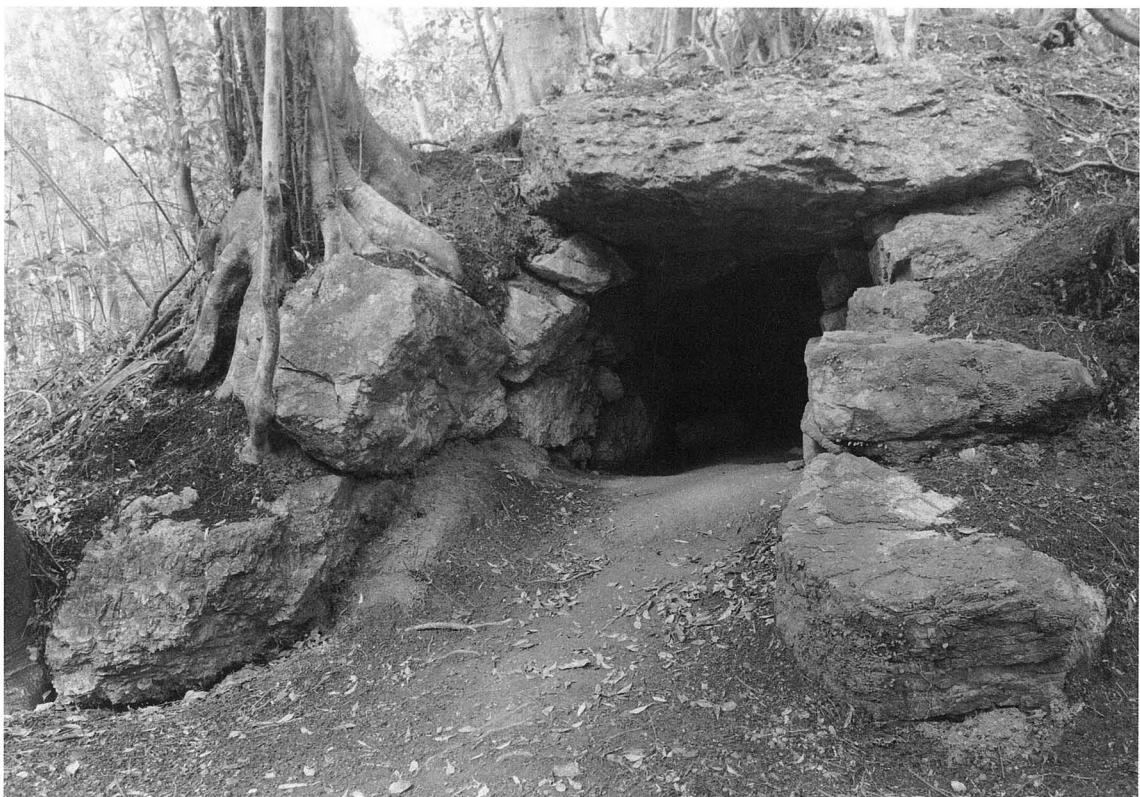
(1) 明見彦山1号墳西側墳丘



(2) 明見彦山1号墳東側墳丘



(1) 明見彦山1号墳石室入口1



(2) 明見彦山1号墳石室入口2



(1) 明見彦山1号墳石室玄門（玄室から）



(2) 明見彦山1号墳石室奥壁



(1) 明見彦山1号墳玄室左側壁



(2) 明見彦山1号墳玄室右側壁



(1) 小蓮古墳の遠景（岡豊城より）



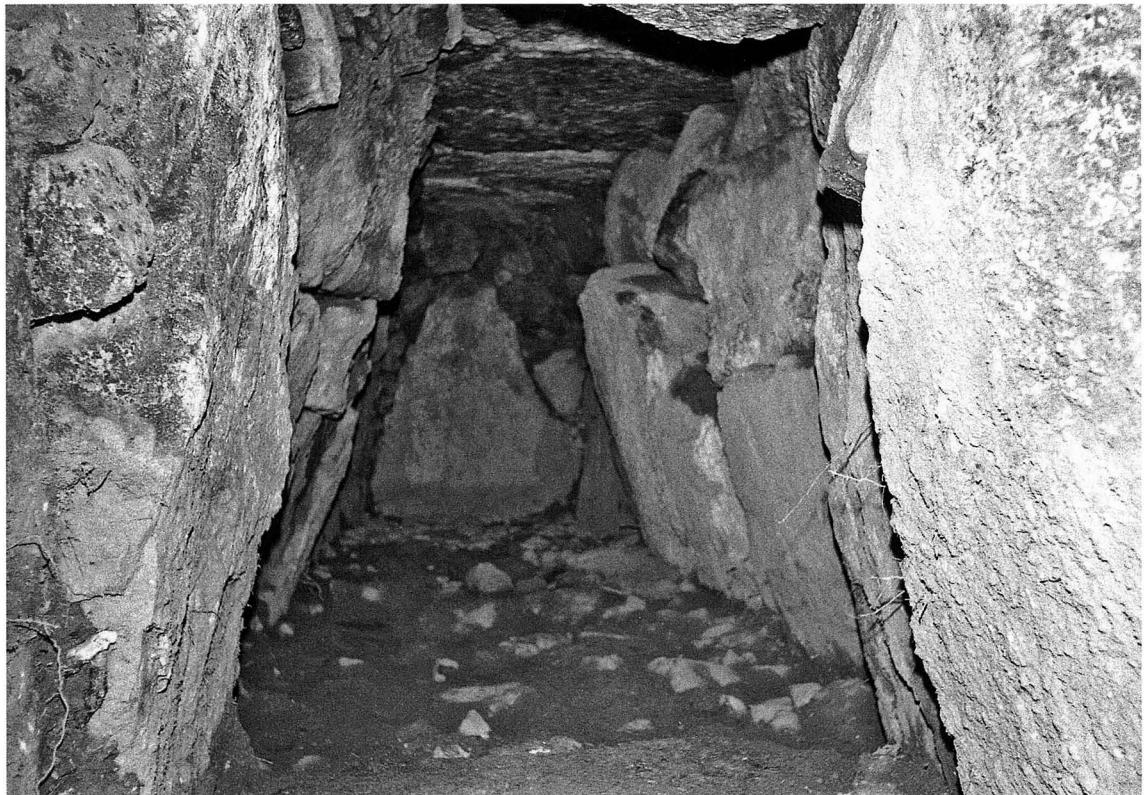
(2) 小蓮古墳の立地（南より）



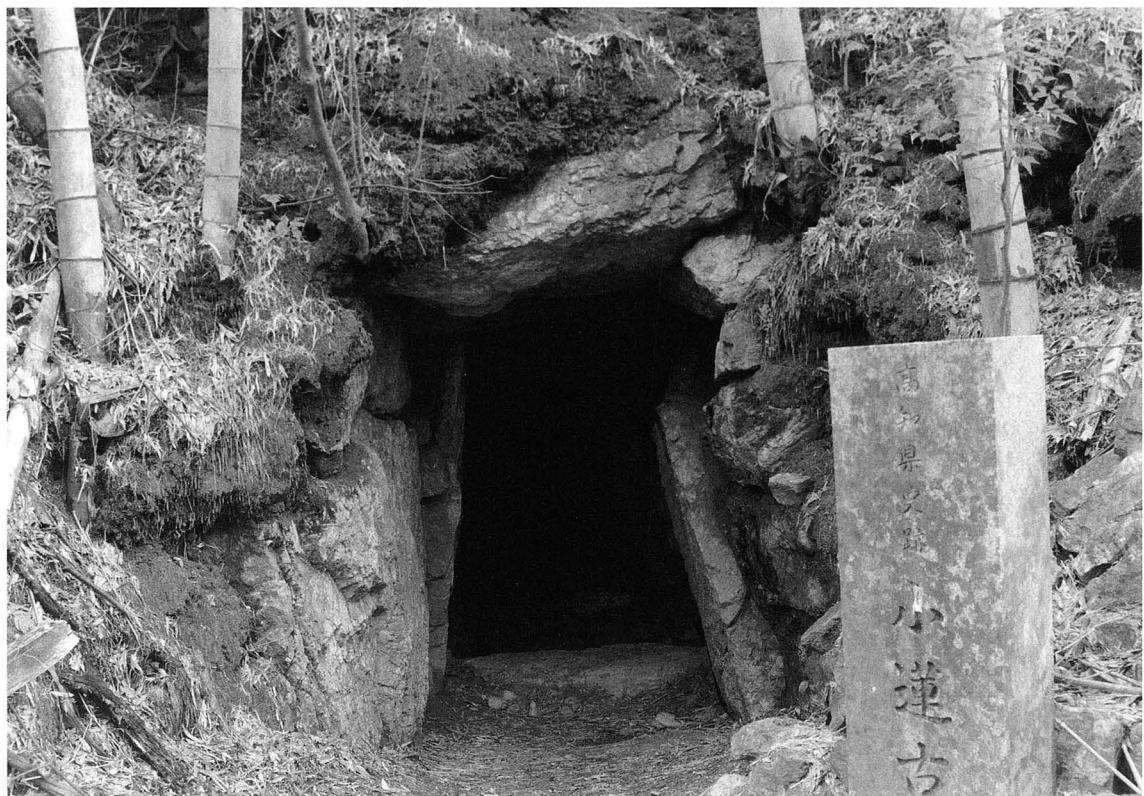
(1) 小蓮古墳墳丘遠景 (1972年調査時)



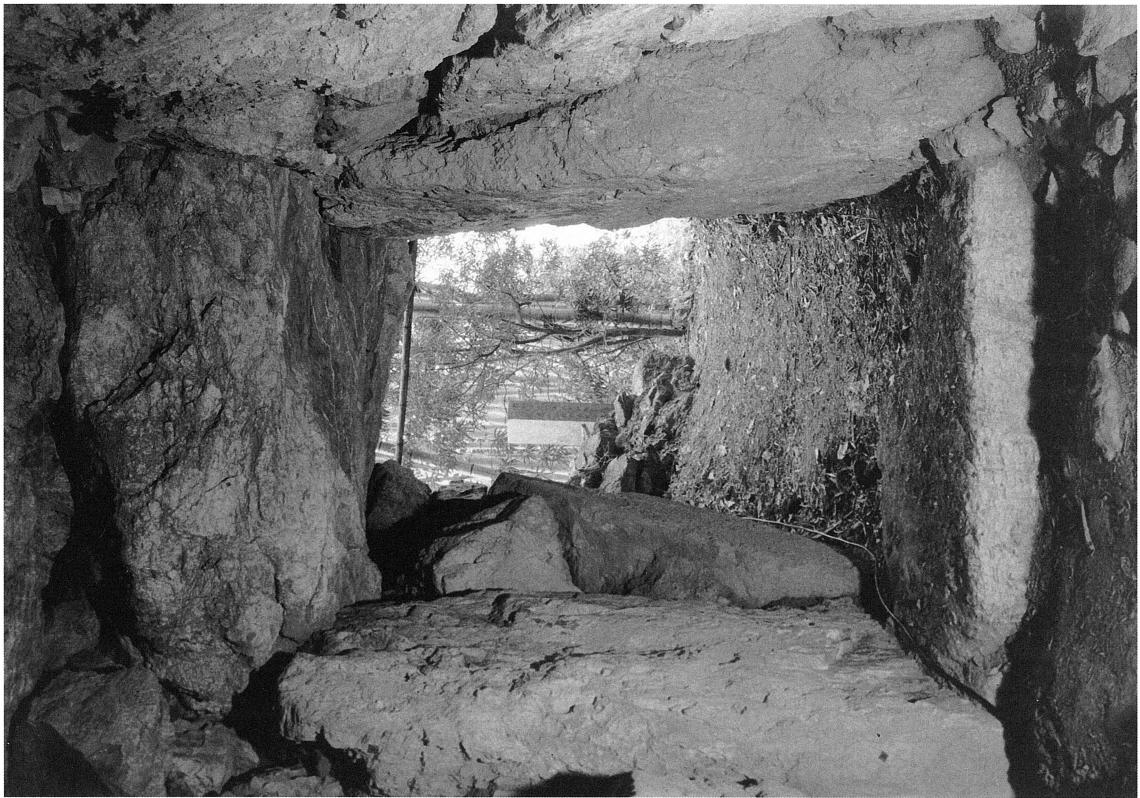
(2) 小蓮古墳墳丘 (1972年調査時)



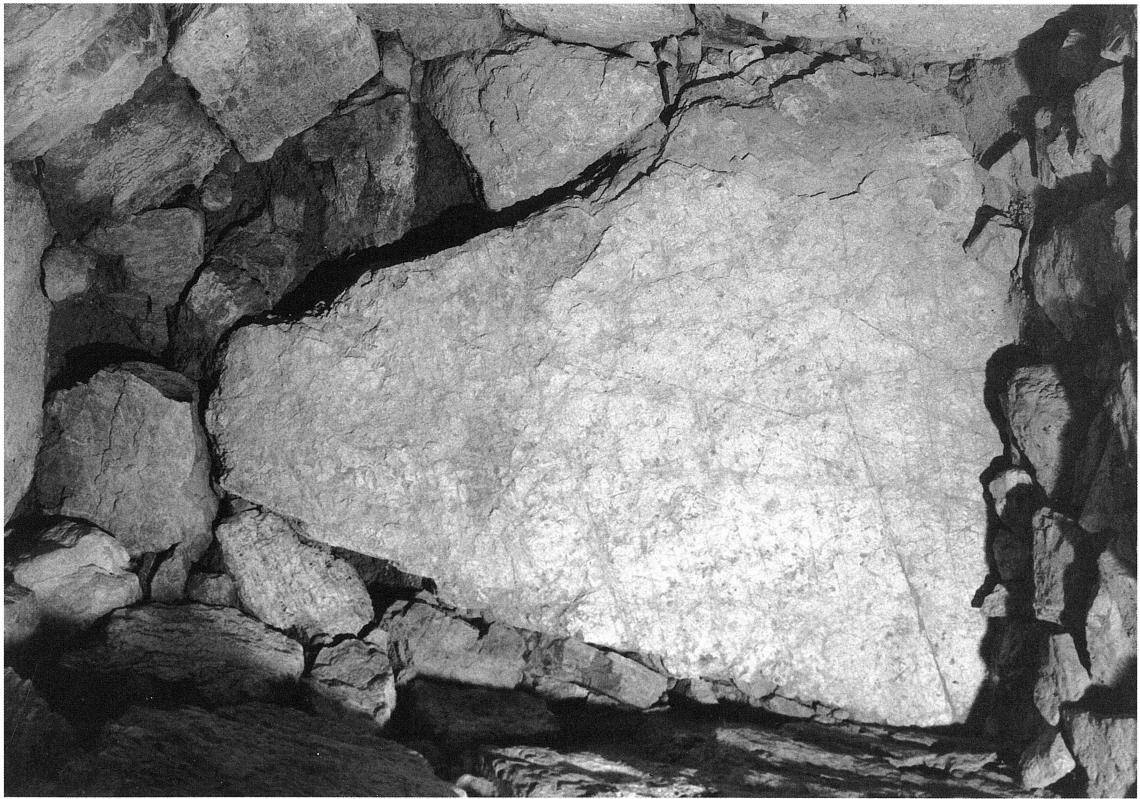
(1) 小蓮古墳石室（1972年調査時）



(2) 小蓮古墳石室入口



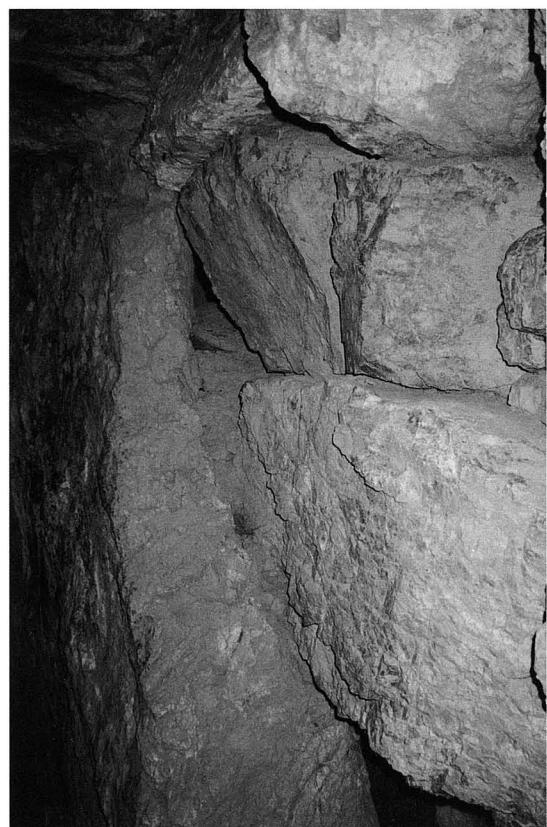
(1) 小蓮古墳石室玄門（玄室から）



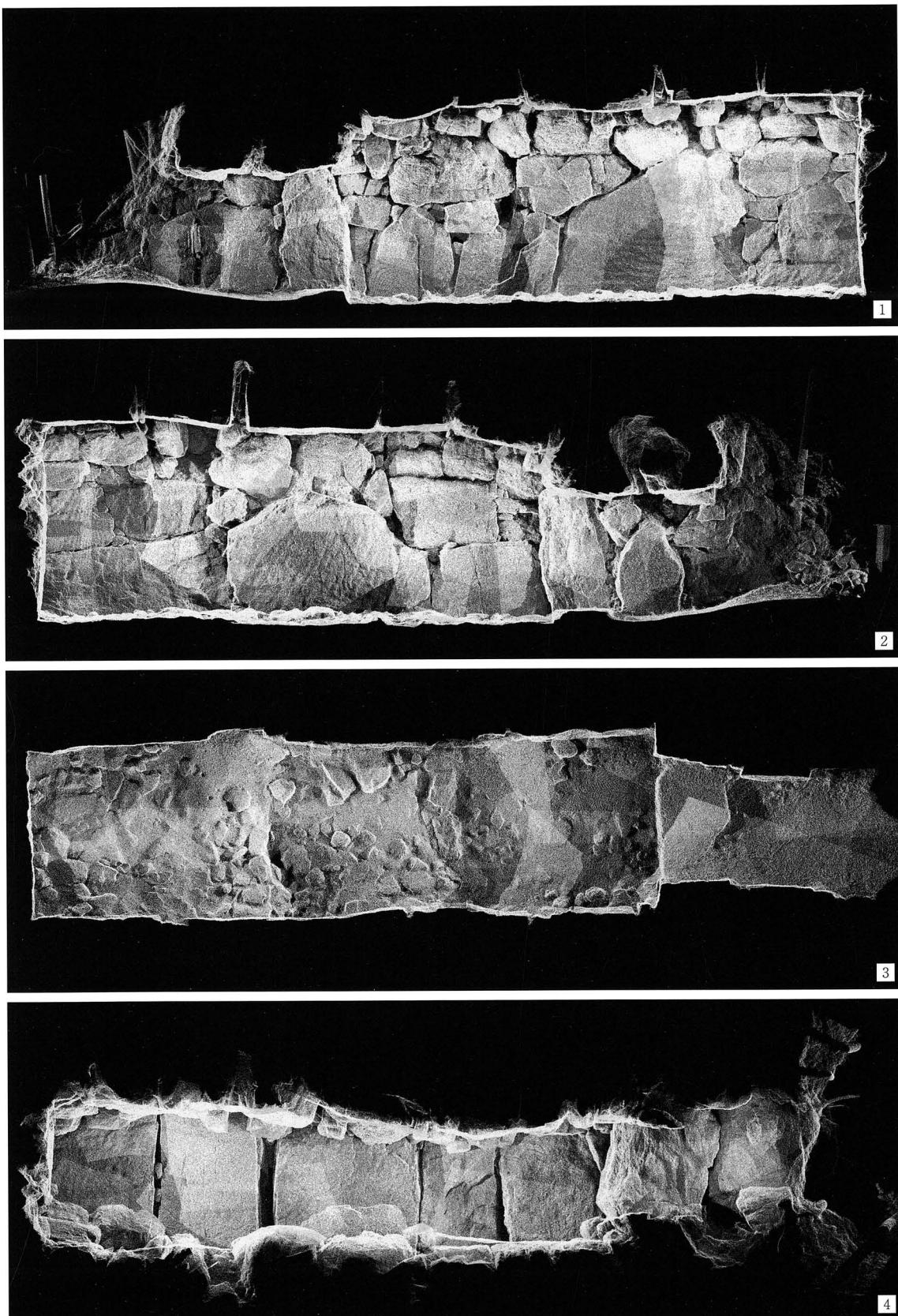
(2) 小蓮古墳石室奥壁



(1) 小蓮古墳石室側壁の傾斜



(2) 小蓮古墳石室右袖石



小蓮古墳石室 3 次元計測の点群データ (1. 右側壁 2. 左側壁 3. 床面 4. 天井)

【報告書抄録】

ふりがな	なんこくしにおけるおおがたこうきこふんのちょうさ				
書名	南国市における大型後期古墳の調査				
副書名					
シリーズ名	高知大学考古学調査研究報告				
シリーズ番号	第3冊				
編著者名	高知大学人文学部考古学研究室（編者：清家 章）				
発行機関	高知大学人文学部考古学研究室				
所在地	高知市曙町2-5-1				
所収遺跡名	所在地				コード
明見彦山1号墳 小蓮古墳	高知県南国市明見字彦山 高知県南国市岡豊町小蓮字光り岩				市町村 遺跡番号
北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
33° 33' 53" (明見) 33° 35' 46" (小蓮)	133° 37' 6" 133° 37' 19"	051216~051228 050210~050218		学術調査 学術調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
明見彦山1号墳 小蓮古墳	古墳 古墳	古墳時代 古墳時代	横穴式石室 横穴式石室		

南国市における大型後期古墳の調査

—高知大学考古学調査研究報告第3冊—

2006年3月発行

編集 高知大学人文学部考古学研究室
発行 〒780-8520 高知市曙町2-5-1

印刷 有限会社 西村謄写堂
